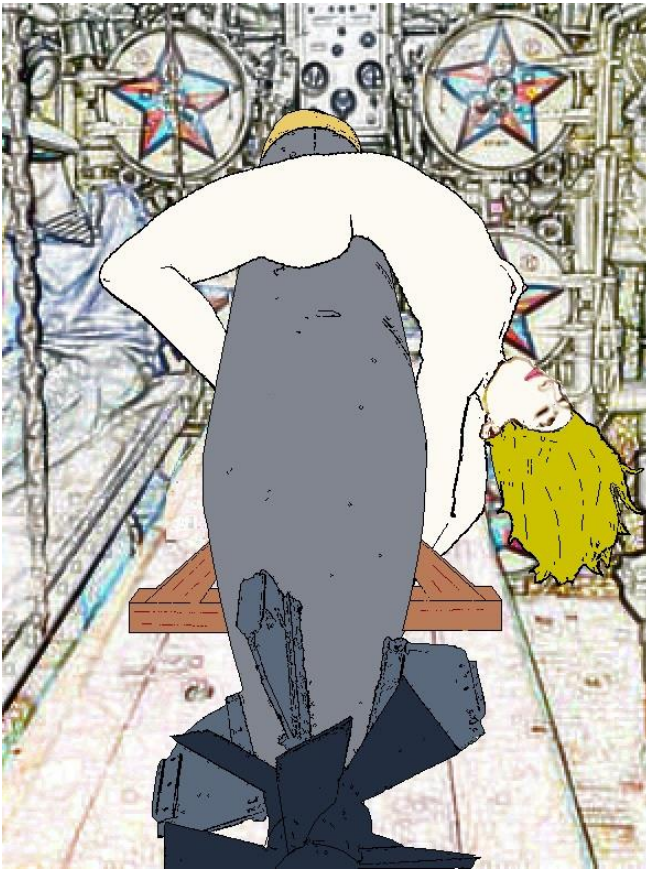
ヒロイン戦記シリーズ：３

ウルフパック（群狼）



濠門長恭

目次

５．詐略 ..... - 3 -
１．拿捕 ..... - 17 -
２．陵辱 ..... - 49 -
３．絶頂 ..... - 105 -
４．反抗
６．馴致
７．決断
８．報復
改訂版に寄せて
後書き

章単位で「しおり」を設定しています。
ＰＤＦ閲覧時にご利用ください。

注記１
章の番号は時間軸に沿って振っています。
注記２
「改訂版に寄せて」は作品の終章です。

５．詐略

ゴムボートに乗っているのは、わたしだけでした。すこしでも波風からのがれようとして、素裸の身を船べりに寄せてうずくまっていました。

自分の時間感覚では三十分に一度くらいの割合で、身体を起こして水平線を見まわしていました。ゴムボートの底はぐにゃぐにゃしていましたし、絶えず波で揺れていたので、立ち上がることはできませんでした。誰も見ていなくても、上半身だけでも裸身をゴムボートの外に晒すのは恥ずかしいことでした。

まして――お腹にも乳房にも、ロープやベルトで打たれた痕がいっぱい刻まれています。自分では見えませんが、背中はもっとひどいことになっていたでしょう。自慢だった金色の長い髪をばっさりと裁ち切られて剥き出しになった首筋から肩にかけては、鎖で縛られていた傷も残っています。それは、見えなくてもぴりぴりする痛みでわかりました。

船底に溜まった水で濡れたお尻は、自分に

見える範囲はすべて赤黒く腫れていました。

わたしの乳房は同年齢の娘たちに比べて小ぶりなほうでした。だというのに、熟し切った桃が強く握られて傷つくように、指の痕が幾つも這いまわっていました。煙草の火に焼かれた乳首も疼いています。薄皮が再生していて、そこだけは、まるで穢れを知らぬようなピンク色をしていました。同じように焼かれた下腹部は無残な禿山と化して、黒い小さなくぼみで汚されているというのに。

虐待の痕跡を全身に刻まれて、素裸で、わたしは大西洋に遺棄されたのでした。

自分の生きられる時間がごくかぎられていることを、わたしは知っていました。わたしに与えられた品は水筒とひと包みの乾パン。そして、信号拳銃でした。

これだけの水と食糧でも、健康な人なら半月くらいは生きられるのではないでしょうか。でもわたしは、連日の強姦と劣悪な環境とに三週間ちかくも痛めつけられ、三日前からは昼夜の別なく私刑に晒されていました。わずか一昼夜の漂流なのに、自分が衰弱しているという自覚がありました。

信号拳銃は、狼以下の鬼畜漢どもがわたしに投げつけた最後の悪意だと思っていました。まったく可能性のない希望でわたしを最期まで苦しめるつもりなのです。

貨客船『クリスティーナ』の船客だったとき、遭難時の心得を船長から教わりました。信号拳銃のことも教わりました。

近くを通りかかった船が波間に見え隠れする小さなゴムボートを見落とすことはあっても、信号拳銃の合図には気づくはずです。しかし、昼間用の発煙弾を確実に視認できる距離は四キロメートルにしかすぎません。この広い大西洋で、わたしが生きているうちに半径四キロメートルの円内を船が通りかかる確率は……かぎりなくゼロにちかいでしょう。

それでも、わたしは絶望していませんでした。生への可能性を信じて、いえ、信じようとしていました。

けれど、わたしの瞳に宿っていたのは、弱々しい希望のともし火ではなかったのです。何度も繰り返してわたしを陵辱した四十八人の男たち。とりわけて、叔父を射殺し部下に船客の虐殺を命じた男への憎悪の炎が、わたし

の瞳の中で燃えたぎっていました。
——疲労に包まれてまどろんでいた私は、打ちこんできた波に裸身を洗われて目を覚ましました。自分でも老婆のようだと自嘲してしまうのろのろとした仕種で身を起こして、目をこすりながら水平線を眺めました。
「あっ……！」
わたしは掌に海水をすくって目をぬぐいました。
見間違いではありません。東の方角に三筋の煙が薄くたなびいていました。かぎりなくゼロにちかい確率が実現しようとしているのです。ところが——じっと見ていると、煙はすこしずつ左へ動いていくではありませんか。何十キロメートルか先にいる船は、通り過ぎようとしているのです。
「神様、お願いですから……」
わたしは両手を組んで天をあおぎました。そして、はっと気づいたのです。雲も煙と同じように左へ流れていました。煙とまったく同じ速さで。動いているように見えるのは、ボートが風か波に揺られて回転しているせいでした。

「神様、ありがとうございます」

雲の下から動かない煙を見つめて、わたしは感謝の祈りを捧げました。

煙は刻一刻と太く濃くなってきました。船橋らしい形も煙の下に見えてきました。

わたしは信号拳銃のケースを開けました。信号弾は六発。そのうち四発は夜間用の照明弾です。明るいときに使っても効果はありません。昼間用の発煙弾は二発きり。銃身を折って、貴重な一発を詰めました。

カチリ。

たしかな音ともに希望が装填されました。

わたしは信号拳銃を抱いて、船が近づくのを待ちました。目の高さから見える水平線までの距離は約四キロメートルです。発煙弾を確実に発見してもらうには、船の水線（海水と接している部分）が見えるまで待たなければなりません。

発光弾の視認距離は夜間で十五キロメートル。これは船の灯火が見える距離と同じです。信号拳銃はそのように設計されているのだと、オベール船長が教えてくれました。

助かっていてほしいけれど……

いつもきちんと制服を着こなしていた船長の姿を、ひさしぶりに思い出していました。そんな感傷は、船体の一部が見えてくるまでの短いあいだだけでしたけれど。

甲板から盛り上がった砲塔と、そこから突き出した砲身もかすかに見分けられます。軍艦です。左右の軍艦は、砲身がひとつ。まんなかの軍艦だけが二本でした。左右の船よりもひとまわり大きく見えます。

軍艦になんか興味はありませんが、新聞の写真やニュース映画で繰り返し見せられているうちに、艦種の区別くらいはつくようになっていました。単装砲は駆逐艦です。連装砲の軍艦は、たぶん巡洋艦でしょう。

マストをいろどる豆粒は信号旗です。この角度では、艦尾に掲げられているはずの軍艦旗は見えませんでした。自分が助かる確率はまだ五十パーセントに過ぎないことを、わたしはわきまえていました。それでも、ゼロに比べれば無限の勝利です。

じりじりと時間が過ぎて。不意にシルエットが横に伸びはじめました。

「あ……ああっ！」

思わずあげた悲鳴で、潮風に焼かれた喉が痛みました。

三隻の針路が変わっています。こちらに横腹を見せて通り過ぎようとしています。皮肉なことに、艦尾の軍艦旗がはっきりと見えました。白地を赤線で十字に区切って、一画だけに青っぽい紋章が描かれています。赤地に黒のハーケンクロイツではないのです。

わたしは膝立ちになって信号拳銃を両手で握り、斜め上へ突き出しました。軍艦が蹴立てている波は、水平線の向こうに隠れています。信号弾の効果を期待できない距離でしょう。でも、これが唯一のチャンスなのです。

ボスン。

頼りない音に似合わず太い炎が銃口から吐き出されました。炎はすぐに消えたのですが、数秒後にオレンジ色の煙が天空に湧きました。煙はふつうとは逆に、下へ下へと伸びていきました。白い雲を背景に聳え立つオレンジ色の逞しい柱。四キロメートルどころか四十キロメートル先からだって見えるのではないかと思いました。

それなのに。煙が薄れるまで見守っていて

も、軍艦の様子に変化はありませんでした。
「どうして……こんなにはっきり見えているのに！？」
　そのときのわたしは、きっと、幼い子供が泣き出す直前の表情をしていたでしょう。でも、わたしは踏みとどまりました。いそいで銃身を折って絶望を抜き取り、最後の希望を装填しました。
　信号弾をすこしでも高く遠くへ打ち上げるために、わたしは揺れるゴムボートの中で立ち上がろうとしました。
　そのときです。
　ボッボッボッボッボッボッボッ、ボオオオオオオオー！
　最後の審判のラッパもかくやと思わせる大音響が海原をどよもしました。汽笛の規則は知らなくても、緊急を告げる合図だとすぐわかる鳴らしかたでした。
　はたして。最後尾の駆逐艦が艦首をめぐらせたではありませんか。遠心力で艦体が外へ傾くほどの急回頭でした。
　その上空をめがけて信号拳銃を撃ちました。
　ボオオオオオーッ！

力強い応答。

わたしは、その駆逐艦に向かって両手を大きく振りました。そして、あわててしゃがみこみました。自分が素裸だったのを思い出したからです。

でも、助けに来てくれている相手に感謝の気持ちを伝えたい気持ちのほうが勝ちました。わたしは横向きになって身体を起こしました。片膝を立てて股間を隠し、左手で乳房をかばいながら右手を頭上で振りました。

ボオオ、ボオオ、ボオオ……

汽笛が励ましてくれます。

耳のそばで鳴らされているような大きさなのに、駆逐艦はなかなか近づいてきません。わたしは焦りませんでした。船は自動車と違ってブレーキがないのです。ゴムボートに横付けするために、ずっと手前から速度を落としはじめているのです。さっきまで白波を蹴立てていた艦首が、今はなめらかに海面を切り裂いています。

艦橋から張り出したデッキに、士官が姿を現わしました。こまかな操船の指示を出しているようです。

最後の数百メートルが縮まろうとしています。水兵が士官にメガホンを手渡すのが見えました。
『アホーイ、お嬢さん。揺れるから身体を低くしていなさい。本艦はこれから……』
英語の呼びかけは、そこで途切れました。
巨大な水柱が駆逐艦を包んだのです。同時に、空気が硬い壁のように襲いかかってきて、わたしを打ち倒しました。音は聞こえませんでした。サイレント映画を観ているようでした。偽りの静寂の中で駆逐艦がまっぷたつにへし折れるのを、わたしは呆然と眺めていました。
水柱が崩れて、大波となってゴムボートを翻弄します。
ズドッ、ヴァアアーンンッ！！！
船べりにしがみついて海水に叩かれているさ中に、轟音が聞こえました。
わたしを救助に向かっていた僚艦を護衛するようにゆっくりと旋回していたもう一隻の駆逐艦が、水柱に噴き上げられていたのです。その駆逐艦も前後にポッキリと折れました。
「これは……魚雷！」

直径五十三センチメートル、全長七メートル。時速八十キロメートル以上で水中を突進する三百五十キログラムの炸薬。魚雷に縛りつけられて純潔を奪われ、それからも魚雷と一緒に吊るされて監禁されていたわたしですが、その威力を目の当たりにするのは、これが初めてでした。

ズドーン！　ズドーン！　ズドーン！

ふたたび爆発音。そちらに目を向けると、まだ遠くにいた巡洋艦の横っ腹が大きく裂けていました。見る見るうちに横倒しになっていきます。傾いた甲板を幾つもの黒い点が滑り落ちていきました。

「わたしのせいだ……」

わたしは両手で顔をおおってしまいました。熱い悲しみと冷たい憎しみが、喉の奥からこみあげてきました。その塊はあまりにも大きくて、吐き出すこともできません。

あのまま通り過ぎていたら、あんなに速度を落としていなかったら……魚雷は命中しなかったかもしれません。わたしに注意を奪われて見張りがおろそかになっていた……なんてことは、なかったでしょうか？

……そう。私は囮に使われたのです。

ゴムボートのすぐ近くにおびただしい泡が立ちました。その泡の中から、黒灰色のシルエットが浮上してきました。全長に比べて極端に小さな艦橋にはＵ３２７の白文字が読み取れました。わたしが昨日まで囚われていたＵ５０１とそっくりな潜水艦でした。

司令塔の側面にある扉が開いて、つぎつぎと水兵を吐き出しました。彼らは沈んでいく船には目もくれず、素裸でゴムボートにしがみついているわたしを物珍しそうに眺めています。

ゴムボートは長い鉤竿で潜水艦に引き寄せられました。ロープを結びつけた浮き輪が投げ入れられました。

「浮き輪にはいれ。引き上げてやる」

声をかけた水兵を、わたしはおもいきりにらみつけてやりました。でも、すぐに目を伏せました。同じ過ちを二度と繰り返したくありません。今度こそ、卑屈で従順な性欲処理人形に徹する決意を固めたのです。

わたしは腋の下に浮き輪をかいこんで、潜

水艦の丸っこい船殻を這い登ろうとしました。でも、一昼夜も座りっぱなしだったので脚が萎えていました。そのうえ、ろくに手がかりもありません。すぐに足を滑らせてしまいました。海に落ちかけて、浮き輪で引き止められました。転んだとき後ろ向きになっていたわたしは、そのまま水兵たちに引き上げられました。腫れたお尻が突起物にこすられて、悲鳴をあげてしまいました。でも、水兵たちはおかまいなしでした。

甲板で待ち受けていた水兵が、左右からわたしを支えました。

「ひゃあっ！」

右側の水兵が、いきなりわたしの乳房をつかみました。揉みしだくというか、無茶苦茶にこねくりまわされました。乳房に加わる圧迫と、傷をえぐられる鋭い痛み。二重の苦痛でした。左側の水兵は、油まみれの手を股間に差し入れてきます。

「ようこそ、おれたちのボートへ。たっぷりかわいがってやるぜ」

私は抵抗しませんでした。それどころか、立っているのがつらかったのは事実なので、

強情は張らないで、その水兵にしがみつきました。脚をすこし開いて腰を押しつけ、指の侵入に協力さえしたのでした。

１．拿捕

夏休みに叔父の家へ遊びに（というより、半年ぶりの掃除に）訪れていたとき、両親が逮捕されたという知らせがありました。それまで名乗っていたコッヘルが偽名で、ほんとうはユダヤ姓のコーエンだと当局につきとめられたためでした。

わたしは幼い頃からずっとマリア・コッヘルとして育てられてきました。当時の身分証明書もそうなっていました。わたしは、本名がミリアム・コーエンであることをなかば忘れてさえいました。

両親の逮捕を知ってからの叔父の行動力には、すさまじいものがありました。

知らせを受けて一時間後には手荷物をまとめて自動車で村を出ると、五十キロメートルはなれた街にある大学へ行って、三年にわたって改良を続けてきたウラニウム遠心分離装置（わたしには、なにかの呪文のようにしか聞こえませんが）の実験設備を壊し、研究書類を持ってフランス国境へ向かいました。

なにがなんだかわからないうちに、私も叔父の狂乱に巻きこまれていました。両親が逮捕された事実を叔父が教えてくれたのは、わたしが自動車に乗ってからのことでした。

明日どころか今夜にでも、官憲がわたしたちを逮捕に来るというのです。

「わたしは殺されるだろう。国家機密に関与していたからね。そしてミリアム。きみも収容所送りはまぬがれないのだよ」

しばらく考えてから、わたしはこう言いました。

「叔父様は逃げてちょうだい。でも、わたしは……村へ戻ります。両親と同じ収容所へ入れてくれるよう、頼んでみる」

今度は叔父が絶句しました。そして、言葉を選びながら教えてくれました。

「兄がどこへ収容されることになるのか、わたしは知っている。そこには、すでに定員の五倍以上の人たちが収容されている……書類上はね。それなのに、今もどんどん新しいユダヤ人が送りこまれている」

「でも、交替でベッドを使うとか床に毛布を敷けば、なんとか住めるんじゃないの？」

即座に反論しましたが、そんなことは自分でも信じていませんでした。収容所についての忌まわしい噂を、まったく耳にしなかったわけではないのです。

それから、わたしはずっと――外出禁止時刻の直前になって、見知らぬ農家の納屋に泊めてもらうまで、助手席で口を閉ざしていました。

質問したいことは、いっぱいありました。叔父のいう国家機密とは、なになのか。たぶん研究内容に関係しているのでしょうが、重さの違うウラニウムをより分けるとどうなるのか、わたしには見当もつきません。研究の虫だった叔父が、どうして地元の警察よりも早く両親の逮捕を知ることができたのか。なぜ、この農家の人たちは素性を問いただすこともなく自分たちを止めてくれたのか。中立国のスイスではなく、なぜナチス支配下のフランスへ行くのか。

けれど、ほんとうに訊ねたい事柄はひとつだけでした……。

コーエンの家系は理数系の遺伝子を持っているのでしょうか。祖父も曽祖父も数学者で

した。叔父は実験物理学の教授ですし、父は町工場の経営者ですが設計技師でもあります。一族の血を受け継いでいるわたしは容易に、決定的な、恐ろしい質問を考えついたのです。

収容所には定員の五倍分の食糧が支給されているのかという。

きっと叔父は答えを知っていたはずです。サンタクロースがどこに住んでいるのかも、どうすれば赤ちゃんを授かるのかも、叔父は正しく誠実に（姪の年齢は考慮しないで）答えてくれました。だから、この質問は封印するしかなかったのです。

アウトバーンは使わないで、地方都市をつなぐ道路を迂回しながら、二日かけてフランス国境にたどり着きました。国境の三十キロメートル手前で、エンジンの故障で立ち往生している軍用トラックに行き合いました。わたしと叔父が荷台に乗りこんで木箱の中に隠れると、なぜかすぐにエンジンがなおりました。

フランスにはいってからは何度も車を乗り換え、綿密に計画されたヒッチハイクをつづけて港町に着きました。そこのホテルで住込

従業員の親子として一週間を過ごしてから、貨客船『クリスティーナ』の船客となったのでした。『クリスティーナ』は親ナチスのアルゼンチンへ精密工作機械を届ける船なのですが、航海の途中で南北を間違える手筈になっていました。

出航したその夜のディナーは、簡潔に表現すれば「どんちゃん騒ぎ」でした。船客の中にはわたしと同様に、肉親を収容所へ送られた人だっていたでしょう。そうでなくても、いつ捕まるかと怯えながら暮らしている同じ民族の人たちが、まだ何万人もいます。

それでも、自由と平等の国へ脱出できる喜びは、生まれながらにそれらの権利を享受している人たちには想像もできないでしょう。わたしは馬鹿騒ぎに眉をひそめながらも、やっぱり心が晴れやかに浮き立っていたのを認めないわけにはいきません。

翌日は、予定になかった遭難対策講習会が開かれました。きっと、船客の気持ちを引き締める目的があったのでしょう。

出航して五日目の朝。わたしは日の出とと

もに目を覚ましました。朝食用の青いワンピースに着替えて控えめのお化粧をしてから、プロムナードデッキへ出ました。

船の速度が生む風で、肩まで垂れた金髪が吹き乱れます。わたしは風とたわむれながら東の空を見上げました。太陽が水平線を切ろうとしています。でも、その彼方にある旧大陸には暗雲がたちこめているのです。

わたしは、くるりと身体をまわしました。夜の帳が上がりきっていない西の空ですが、その向こうには自由と平等の新大陸が……いえ、あれはなに？　水平線の手前の細長いシルエットは。

小さな艦橋と、一門きりの大砲。他船の航路を避けているわたしたちにとって、もっとも出会いたくない相手でした。

でも、艦橋の後ろに翻っている旗は、黄色と黒で四分割されています。

（よその国の潜水艦なんだわ）

わたしは、ほっとしました。わたしは知らなかったのです。それが国際信号旗のMであり、一旒だけ掲揚された場合は『停船せよ』の意味を持つとは。

そんな知識はなくても。こちらに向けられた大砲が赤黒い煙と炎を吐き出して、船の前方に水柱が立ち、その直後に雷鳴が轟いては、最悪の事態に直面しているのではないかと疑わざるをえませんでした。

そして、潜水艦の司令塔に描かれた『Ｕ５０１』の白文字に気づいたとき、わたしの疑念は恐怖に変わりました。

わたしは身を翻して船室に駆けこみました。

「叔父様、起きて……Ｕボートが、Ｕボートが、わたしたちを撃っているの！」

強く揺すると、叔父はがばっと跳ね起きました。わたしを押しのけて船室から飛び出し、すぐに戻ってきました。

「きちんとした身なりを……しているね。わたしも着替えよう」

「なにを言ってるの、叔父様？　この船が沈められるのよ！」

「落ち着きなさい、わたしの娘」

洗面所へはいりながら、叔父がウインクしました。その表情は、さすがに強張っていましたけど。

「もう撃ってこない。停船させるための威嚇

射撃だ。連中は臨検に乗りこんでくるつもりだ。自由フランス側の船と疑っているのだろう。それなら、書類はととのっている。うろたえれば怪しまれるよ」
「わかりました、お父さん」
　わたしも、すこし落ち着きを取り戻していました。
　ドアがはげしくノックされて、わたしの心臓はきゅっと縮こまりました。でも、それはこの船の船員でした。まもなくドイツ軍の臨検があると教えに来てくれたのです。叔父の予想どおりでした。
　わたしはドレッサーに座って、まだドキドキしている心臓を静めようとしていました。
　父ヨハン・コッヘルは機械技師で、この船に積んでいる工作機械の扱い方を現地で教える仕事を引き受けました。わたしマリア・コッヘルはひとり娘。これから二年間、ギムナジウムを休学の予定。母のシュテラは、わたしが五歳のときに死別しました。
　絶え間なくつづいていたかすかなエンジンの振動が消えて静まりかえった船室で、わたしは書類に記された自分の素性をおさらいし

ていました。
　しかし、それはまったく無駄な努力だったのです。

　断わりもなくドアが開けられて、ドイツ海軍の士官が押し入ってきました。
「ヨハン・コーエンだな。研究書類は、どこにある？」
　質問ではなく断定であり、尋問でした。
　叔父はため息をついて、腰掛けていたベッドから立ち上がりました。クローゼットを開けてトランクケースを出し、その中から書類鞄を取り出しました。
「六月に提出した報告書から、ほどんど進展はないがね」
　士官は鞄から書類を抜き出すと、内容には目もくれずに細かく引き裂きました。
　床に散乱した紙屑を、叔父は悲しそうに見つめていました。
「わたしを名指しで来たな。きみたちの目的は、わたしの亡命阻止か。こうなっては、きみたちに従うしかなかろう。だが、ほかの船客たちは見逃してもらえないだろうか」

士官は腰から拳銃を抜きました。
「本官の受けた命令は、これだ」
パン、パン。
叔父は驚愕の表情で士官の顔を見上げながら床に倒れました。
士官が片膝をついて、叔父のこめかみに銃口を当てました。
「やめてえっ！」
目まぐるしく変化する状況にようやく追いついたわたしは、士官に飛びかかりました。が、ベッドまで跳ね飛ばされました。すぐ立ちあがったのですが、ドアをふさいでいた水兵がすばやく背後に回りこんで、わたしを羽交い絞めにしました。
「やめてっ！　撃たないで！」
パアン。
叔父はびくっと痙攣して、それきり動かなくなりました。
「なぜ殺したの！　叔父は抵抗しなかったのに！」
士官がわたしを振り返りました。ゆっくりと床から膝を上げて。
バシン！

視界が赤く染まって、耳がキインと鳴っています。右の頬が焼けるようです。
「おまえは……ミリアム・コーエンだな」
相手は、わたしの素性も把握しているようでした。
死に直面しているのだと、わたしは思いました。
この二週間あまりの逃避行は、なんとなく夢を見ている気がしていました。両親とはおそらく永遠に別れて、捕まれば自分も同じ運命をたどるのだと頭では理解していても、実感はありませんでした。活劇映画のヒロインになったような気分さえ、どこかにあったのです。
けれど。目の前で叔父が撃ち殺されたのです。圧倒的な現実が、ここにありました。
「ミリアム・コーエン、●七歳、ユダヤ人だな」
士官がピストルをしまいながら繰り返しました。丸顔の中にちんまりと座った目が、わたしの身体を値踏みするかのようにじろじろと眺めています。子供っぽい顔つきなのですが、薄い眉毛がこの男に冷酷な印象を与えて

いました。
　わたしは、まだ衝撃に圧倒されていました。答えられないでいると、同じ質問が繰り返されました。わたしがミリアム・コーエンであること、●七歳であること、ユダヤ人であること。そのすべてが重大な罪ででもあるかのような口調でした。
「そうよ。わたしはミリアム・コーエンよ。たしかに●七歳だわ」
　わたしの声は恐怖と怒りで震えていました。はっきりと怒りのほうが強かったのです。
「そしてユダヤ人よ。残念なことに、あなたたち呪われた民族の血が四分の一だけ流れているけどね！」
　士官の目が、すっと細くなりました。右手が上がっていきます。
　わたしは顔をかばおうとも、逃げようともしませんでした。無言で相手をにらみつけていました。
　ガシンッ！
　羽交い絞めにされていなければ、壁まで吹っ飛んでいたでしょう。膝に力がはいらず、水兵の腕に吊るされていました。

口の中に血の味がします。わたしは士官をにらんでから、ぺっと床に赤い唾を吐きました。
「これはまた……お行儀の悪い娘だな」
明白な侮辱を受けたというのに、士官はくくくと笑っています。床に転がっている叔父を蹴ってあおむけに転がし、ズボンのベルトを抜き取りました。
「お行儀の悪い娘には、お仕置が必要だな」
そいつはわたしを水兵からもぎ取って、ベッドに押し倒しました。うつ伏せにされて背中を押さえつけられました。両腕が背後にねじ上げられます。
「いやあっ……なにをするの！　どうせ殺すんでしょ！　さっさと撃ち殺しなさいよ！」
なにかしら辱めを受ける恐怖にかられて脚をばたつかせましたが、効果はありません。背中で両腕を重ねられて、ベルトが巻きつけられました。
「いやだ……縛らないで！　あうう……痛い！」
ベルトをバックルに通して引き絞っているのでしょうか。ぎちぎちと腕が締めつけられ

ていきます。
「まったくうるさい小娘だな」
　顔の横にナイフを突き立てられました。
「ひっ……！」
　今度こそ殺される。わたしはぎゅっと目をとじました。
　ピイーッと鋭い音。士官が切り裂いたのはベッドのシーツでした。それをくしゃくしゃに丸めています。
「口を開けろ」
　髪をつかまれて顔が上がります。それでも歯を食いしばっていると、士官は水兵に声をかけました。
「おい、テオ。ここへ来て、小娘のおっぱいを握りつぶしてやれ」
「え……あの？　おっぱいを、ですか？」
「上官の命令に従えないのか？」
　水兵を叱る声が愉快そうでした。
「はいっ！　テオ・シュネル一等兵、小娘のおっぱいを握りつぶします」
　撃ち殺される痛みは想像できません。でも、乳房を握りつぶされる痛みは容易に想像がつきます。肉体の感覚に直結した恐怖に、わた

しはおびえました。
「やめて……いうことをききます」
　口を開けると、シーツの塊が押しこまれました。喉の奥までふさがれて、息が詰まりそうになります。
「う、ううう……」
　涙がぼろぼろこぼれていきます。縛られたことよりも、猿轡をされたことよりも、暴力をにおわされただけで屈服した自分が悔しかったのです。
「残念だったな、テオ」
「はい、残念であります」
　撃てば響くように答える水兵。この人は本気で残念がっています。
「警告しておくぞ、小娘」
　まだうつ伏せに押さえつけられている背中が、どすんと重くなりました。
「吐き出したら、つぎはおまえの服を切り裂いて、それを詰めてやるぞ」
　口の中で膨らんだ詰め物は歯の裏側まで圧迫して、吐き出そうにも吐き出せません。腕をねじ上げられているので、肩が軋むように痛みます。背中に馬乗りされて、ますます息

ができません。
　すうっと太腿の裏側に風が当たりました。
「あええ！　うううーっ！」
　スカートをめくられたのです。それどころか、パンティまでずらされようとしています。
「ああああっ！　いああああっ！」
　上半身はがっちり押さえつけられていて、まったく動かせません。足をうしろに蹴り上げたり、お尻をくねらせたりして抵抗しましたが、とうとうパンティを膝までずらされてしまいました。なぜか、ドアの前にもどっていた水兵が、前かがみになっています。
　わたしのお尻、男の人に見られています。きゅっと引き締まっていて、男の子みたいだねと友達にからかわれたことのあるお尻です。男の人が見ても面白くないでしょう。いやらしい期待を裏切ってやれて、ざまを見ろです……そうとでも考えなければ、恥ずかしくて死にそうです。
　バシン！
　いきなり、お尻に衝撃が広がりました。
「……！？」
　首をねじ曲げても男の背中ばかりで、なに

をされたのかすぐにはわかりませんでした。男が腕を振り上げました。手にスリッパを握っています。
　スリッパがびゅんと唸って――お尻に叩きつけられました。
「うぐっ……！」
　乾いた音が背骨を駆け上がって、肩を震わせました。
　バシン！　バシン！　バシン！
　叩かれるたびに衝撃が走り、お尻が熱くなっていきます。
「あうう……ひっく」
　悔しさと恥ずかしさ、それにすごい痛さ。わたしは泣きだしてしまいました。
　小さな頃、父にお尻をぶたれたことはあります。でも、それはごくあたりまえの躾けでしたし、じゅうぶんに手加減されていました。女性を辱める目的で、男が手加減なしで、しかも道具を使ってお尻を叩くなんて、これまで想像したこともなかったのです。
　十発も叩かれたでしょうか。わたしのお尻、たぶん真っ赤になっています。男がわたしの上からどいても、わたしはうつぶせのままで

しゃくり上げていました。
　すっとスカートの裾が持ち上げられました。
「え……？」
　ベルトで縛られている腕に、スカートの裾が巻きつけられました。
　そのままベッドの端まで引きずられて、強引に立たされました。立ち上がっても、スカートはまくられたままです。パンティは膝に絡みついたままです。
「そら、歩け」
　後ろから肩を押されました。信じられないことに、そんな恥ずかしい姿のわたしを、士官は船室から追い出そうとしています。
「んぐぐう……いああ……」
　頭をぶんぶん横に振りました。さらに強く肩を押されました。それでも、腰を引いて後ずさろうとすると、パシンとお尻を叩かれました。
「ぐひっ……？」
　平手でした。指がお尻の谷間に食いこんできました。
「いああ……」
　わたしを叩いた手は、まだお尻に置かれて

います。指がお尻の奥をえぐってきます。

たまらなくなって、わたしは前へ歩きました。

わたしを追い立てる役目は、ドアのところで水兵が引き継ぎました。同じようにお尻に掌を当てて、ぐいぐい押します。押しながら撫でています。それでも、指で変な悪戯を仕掛けてこないので、我慢して歩きました。

プロムナードデッキを下りて、第一甲板まで歩かされました。波に揺れている船の急な階段を、手すりにつかまらずに下りるのは困難でした。後ろ手に縛られていてバランスを取れないのですから、なおさらです。膝に絡みつくパンティも脚の動きを妨げるし、あばれたとき靴が脱げていたので、ちょっと踏ん張るだけで滑りそうになりました。わたしは何度も転びかけては、水兵に抱き支えられました。そのどさくさに乗じて胸をつかまれたり、誰にも触れさせたことのない地帯にまで手を差しいれられたりしました。それでも足を踏みはずすのが怖くて、おそるおそる身をよじるのが精一杯の抵抗でした。

第一甲板には船員たちが集められて、短機

関銃を持った水兵が見張っていました。わたしは船員とは反対の左舷につれていかれて、腕にさらにロープを巻かれて、甲板の手すりにつながれました。わたしは手すりに背中を押しつけて、剥き出しのお尻をすこしでも人目から隠そうとしました。でも、見張の水兵がにやにやしながら船員よりもわたしのほうばかりに目を向けていたのですから、あまり効果はなかったのだと思います。

Uボートからは全部で五人が乗り移っていました。丸顔の士官を含めて四人が手分けして、船客を連行してきました。船客はわたしと同じ側に、でも十メートルほどはなれた場所に集められました。もう一丁の短機関銃を持った水兵が、船客の見張に立ちました。

船客は、殺された叔父とわたしとを除いて十八人だったと思います。丸顔の士官が、船客名簿を見ながら、ひとりずつ名前と出自の確認を始めました。

最初に目をつけられたのは、黒髪を都会風に短くカットした女性でした。

「おまえ、本名はなんという？」

「レイチェル・フライシュマン。本名ですわ。

夫はハウザー商会の副社長です」
　豊かな胸と張り出したお尻をピンクのスーツに包んだ女性は、『小娘』のわたしとはまるで違うおとなびた雰囲気を身につけていました。でも、なんとなく、士官に媚びているような感じがしました。
「年齢は？」
「二十三歳です」
　士官が胸ポケットから手帳を取り出して、船客名簿と見比べています。叔父とわたしだけでなく、船客全員の素性を知られているのかもしれません。
「ユダヤだな。よし、そっちだ」
　士官がわたしを指差しました。その女性は列から引き出されて、わたしの隣に立たされました。わたしの辱められている姿を見て、ぶるっと身体を震わせましたが、わたしにも水兵にも理由を訊ねようとはしませんでした。自分にも難が及ぶことをおそれたのでしょう。
　つぎに目をつけられたのは、明るい栗色の髪を肩のところで切りそろえた少女でした。わずかにそばかすの浮いた顔はわたしよりも年下に見えましたが、白いサマーセーターは

わたしよりも大きな胸で盛り上がっていました。
「おまえは？」
「ジーナ・マイヤー、●五歳です」
　ヒュウと水兵が口笛を吹きました。
「父親がハーフ、母親はゲルマンか。四分の一ならユダヤ人だな」
　ジーナも列から引き出されました。
「姉さんを、どうするんだ！」
　少女の肩に手をかけようとした水兵の腕をつかんだのは少年でした。そばかすだらけの顔はジーナとそっくりの輪郭で、髪の色も同じでした。
「おまえは……ハンス・マイヤーか。何歳だ？」
「●四歳だよ。弟なんだから、しかたないじゃないか」
　自分が姉よりも年下であることに我慢ならないといった口ぶりでした。こんな状況だというのに、わたしは思わずほほ笑んでしまいました。
「よし、こいつもだ」
　それまでは嬉々として命令に従っていたテ

オ・シュネル一等兵が、戸惑ったように士官を振り返りました。
「ですが……こいつ、男ですよ？」
「神に呪われた存在だ。人間ではない。神も目をつぶってくださるだろう」
「はあ……まあ、副長のご命令ですから。でも、そのぶんおれたちへの割当てが……」
「心配するな。とびきり生きのいい小娘が、さっきから物欲しげにこちらを見ているじゃないか」
　そう言って、士官はわたしを指差しました。
　わたしは、この選別の意味を完全には理解していませんでした。けれど、自分が特別にひどい目にあわされるのだろうとは、察しがつきました。
　マイヤー姉弟を列から引き出そうとする水兵の前に、中年の夫人が立ちはだかりました。
「待ってください。子供たちをどうするおつもりですか。わたしはアネリーゼ・マイヤー。この子達の母親です。ドイツ人です」
　それには答えず、士官は別の水兵に命令しました。
「このご夫人は船員たちと一緒にしておけ」

「いやです。わたしは夫と一緒にいます。もちろん、子供たちも」
　士官は水兵に出した命令を取り消しました。
「このご夫人は列に戻しておけ」
　それ以上の抗議には耳を貸さず、姉弟をわたしたちのほうへ連行しました。
「これで四人か。満杯だな」
　士官がつぶやきました。そして、短機関銃をかまえている水兵に命令しました。
「フォイト伍長、撃て！」
　タタタタタ、タタタタタ！
　ためらうことなく発射された弾丸が船客をなぎ倒していきます。
「きゃあああっ……！」
「やめろ、人殺し！」
「お父さん！　お母さん！」
　わたしのまわりの三人が悲鳴をあげました。わたしは……口に詰め物をされているので、歯ぎしりすらできません。
　船員たちも、もう一丁の短機関銃を突きつけられているので動けません。それでも船長が、胸で銃口を押し返しながら士官に詰め寄りました。

「これは虐殺だ。あなたがたに、こんなことをする権利はない」
「軍の作戦に民間人が容喙する権限こそ、ないのだがね」
「これが作戦なものか！　わたしは必ず貴官を告発するぞ、フランツ・コレル大尉」
「お好きなように。ええと……ロイク・オベール船長」
士官――コレル大尉は下級船員たちをピストルで脅して、救命ボートの一隻を甲板の高さまで下ろさせました。それに乗れと、わたしたち四人に命じました。
すぐに殺されるのではなさそうだと、わたしは判断しました。悔しいけれど、命令に従うしかありません。でも、ブランコのように揺れているボートに手すりをまたいで乗り移るなんて、後ろ手に縛られていては無理です。わたしは両側から抱えられて（胸やお尻を乱暴に揉まれながら）、ボートに投げこまれました。
船員たちを見張っていた水兵とコレル大尉が救命ボートに乗り移ってきました。
救命ボートが海へ下ろされると、船外機付

の小さなゴムボートが近づいて、二艘をロープでつなぎました。ゴムボートには三人の水兵が乗っています。ぎゅう詰めにしても五、六人がいいところでしょう。

ゴムボートに曳航されて、救命ボートも動きだしました。わたしたちは二人ずつならんで後ろ向きに、中央の腰掛板に座らされました。舵取りの席にすわっているコレルと向かい合わせです。わたしは叩かれたお尻が痛いので腰掛板から突き出して、太腿で座っていました。

「どうした、テオ。さっきから様子が変だぞ」

コレルが声をかけた相手は、わたしたちを後ろから見張っている水兵です。いちばんたくさん、わたしの身体を撫でまわしたやつです。

「いえ……なんでもありません」

声がうわずっていました。

「心配するな。本官は髭の生えたむさ苦しい男に興味はない。安心していろ」

コレルの言うように、水兵の顔は無精髭でおおわれていました。そういえば、ゴムボートの三人も髭面です。きちんと剃っているの

はコレルだけでした。
「いえ、そういうわけではありません……副長、お願いですからこの娘、こちらを向かせてください。ケツを見てるだけで、おれ……暴発しちまいそうです」
　わたしは、どきっとしました。この水兵はわたしたちの背中に短機関銃を向けているのです。暴発されたらたいへんです。
「だらしないやつめ。小娘、反対向きに座れ」
　コレルが唇をゆがめて薄く笑いました。髭のない丸顔。この男が笑うと、もともと小さい目が点のようになって、冷酷無情の面構えになります。でも水兵のくだけた物言いは、この男に親近感を抱いているようでした。
　こんな男の顔を見ないですむのですから、わたしは喜んで反対向きに座りなおしました。
「これで安全装置はかかったな？」
「はい。お手数をかけて申しわけありません」
「おまえは当直からはずしてやる。帰艦したら、すぐにでも小娘に鍛えてもらえ」
「はいっ！　ありがとうございます！」
　シュネルは喜色満面といった態でした。
　わたしは、まず自分の勘違いに気づきまし

た。暴発というのは短機関銃のことではなくて、性交にともなって起きる男性器官の現象を意味していたのです。わたしだって、ボーイフレンドの股間が異様に膨張する現象くらいは知っていました。

この理解は、わたしに恐慌をもたらしました。わたしたちは潜水艦の男たちの慰み物にされるのだと、悟ったからです。もっともハンスの役割については、見当もつかなかったのですけど。

わたしが衝動的に海へ飛びこんだりしなかったのは、個人的な危機を凌駕する事態が起きたからです。

不意に潜水艦の大砲が光って、炎と煙を吐き出しました。

ズドーン！

雷鳴のような砲撃の音が聞こえた直後、反対の方角でもっと大きな音がしました。

ズッシーンン！

振り返ると、貨客船の横っ腹に大きな穴が開いていました。

ズドーン！　ズッバアーン！

また砲撃の音が轟き、こんどは船尾にちか

いあたり、水線すれすれに水柱が立ちました。
「弾着高さが逆だ。機関部には直撃のほうが効果があるのにな」
コレルが、まるで他人事のように砲撃の批評をしました。
わたしたち四人にとっては、他人事どころではありません。船に残されているのは、わずか五日間でも一緒に暮らした人たちなのです。自分たちの危険も省みず、迫害されているわたしたちの亡命に尽力してくれた人たちなのです。そして……撃たれた人たちも、何人かは生き残っているかもしれません。
船尾が水没して船首が持ち上がり、急速に沈んでいきます。途中まで下りていた救命ボートが傾いて、乗っていた人が海に投げ出されました。甲板にいる人たちも、つぎつぎと海へ飛びこんでいきます。でも、誰ひとり浮かんできません。沈没する船の大きな渦に巻きこまれて……。
わたしの横でフライシュマン夫人（レイチェル）が、くたっと船底に崩れました。ハンスは姉さんを胸に抱きしめて、沈んでいく船を呆然と眺めています。わたしは――なんと

かして口の詰め物を吐き出そうとして、もがいていました。たとえ物理的に強制された沈黙であっても、この悪逆非道な行為を弾劾しないでいることは、わたしの良心が許しません。
「人殺し！」
　叫んだのはハンス少年でした。
「民族も国籍も関係のない、無差別の皆殺しじゃないか。おまえたちこそ、神に呪われた民族だ！」
「威勢のいい坊やだな。おまえの後ろに座っている小娘みたいにしてほしいのか？」
　彼の首筋が赤くなりました。わたしの恥ずかしい姿を思い浮かべたのでしょう。
「ぼくは男だ。裸にされたって平気だ。叩けるものなら叩いてみろ。殴り返してやる。手を縛られたら体当たりで、おまえなんか吹っ飛ばしてやる」
　コレルが、また目を小さくして唇をゆがめました。
「ボートに戻ったら、望みどおりにしてやる。楽しみにしていろ」
　わたしにも同じように、酷薄な薄笑いを向

けてきます。
「どうせ殺されると思って、自暴自棄になっているな」
　自暴自棄かどうかは自分でもわかりません。でも、男たちの慰み物にされたあとは殺されるのだと覚悟していました。黙って殺されるつもりはありませんでした。猿轡をはずされたら、声のつづくかぎり男どもを罵ってやる。縛めをとかれたら、目玉を引っ掻くくらいはしてやるつもりでした。
「おまえたちは、とんでもない勘違いをしているぞ。おまえたちは、これから崇高な任務に就くのだ。その若い肉体で乗組員に奉仕するという」
　たとえ虫ケラでも役に立つうちは殺さずに利用する。それは、人間が神に与えられた特権だと、コレルはうそぶきました。
「蜜蜂とか蚕のようにな……おっと、蚕は最後には煮て殺されるのだったか」
　おおぜいの男たちに強姦されて、最後には殺される。それは女性にとって、もっとも忌まわしい運命です。
「真心をこめて奉仕することだな。運がよけ

れば、優秀な民族の子供を授かるかもしらんぞ。そこの坊主には無理だが」
　わたしは憎悪のかぎりをこめてコレルをにらみつけました。そうでもしていなければ、気をうしなってしまいそうでした。

２．陵辱

潜水艦の丸みをおびた舷側に垂らされた縄梯子を、水兵たちは猿のように駆け上がっていきました。わたしたちには真似のできない芸当です。レイチェルは途中で踏みはずしてテオの上に転げ落ちました。いい気味だと思ったのですが、下敷きになった男はにやにやしていました。ハンスはなんとか自力で登れましたが、レイチェルとジーナは腰にロープを巻かれて甲板まで引き上げられました。そしてわたしは――わざわざ甲板から下りてきた水兵の肩に担がれました。甲板に下ろされたとき、膝に絡まっていたパンティがなくなっていました。

そのせいでしょう。垂直の通路から潜水艦の中へ吊り下ろされたときは、口笛の嵐でした。スカートの裾を膝のあいだに挟んで、すこしでも男どもの目から下半身を隠そうとしましたが、お尻を捲り上げられているのですから、効果はなかったかもしれません。

潜水艦の中は、貨客船の船室よりずっと狭

く感じられました。トンネルのような半円形になっていて、どこまでが壁でどこからが天井か、はっきりしません。何本ものパイプが剥き出しで走っているし、たくさんの計器やハンドルが壁と天井を埋めていました。部屋というより機械の内部です。奥行きは十メートルほどありましたが、その中央に天井から太いパイプが突き出ていて、見通しを妨げていました。

その狭い空間に二十人ほどの男どもがひしめいていました。

円筒の壁に沿って並んだ粗末な椅子のひとつだけに肘掛がついていました。鼻の下から顎まで焦げ茶色の髭に埋もれた士官が座っていました。大尉のコレルと同じ、三本筋の階級章をつけています。わたしたちは、そいつの前に並ばされました。

「任務完了しました、艦長殿」

コレルが敬礼をしました。肘を脇にひきつけた、まるで折りたたんだような無様な敬礼でした。艦長も立ち上がって、同じような敬礼を返しました。

「逃亡船は撃沈、コーエン教授は射殺しまし

た」
　得意げに報告する声を聞いて、あらためてわたしは、この男への憎悪をつのらせました。
「彼の所持していた研究書類も処分しました。それでですね……」
　いかにもな軍人口調が消えて、コレルは言いにくそうにしています。
「ええと、戦利品……なんですが。分配といいますか、もし艦長にご希望があれば……」
　女に飢えた獣の目つきで、艦長はわたしたちを順番に眺めています。ハンスを見たときだけは眉をひそめました。
「悪い癖が出たな、フランツ」
　とがめている口調ではありませんでした。
「まあ……海へ捨てるわけにもいかんだろう。好きにしろ。娘たちの配属は貴様にまかせる。おれは余り物でかまわんぞ」
「とんでもない」
　コレルがにやりと嗤いました。上官に媚びている厭な嗤いです。彼はジーナの腕をつかんで、艦長の正面に立たせました。
「艦長には、この娘を差し上げます。●五歳ですよ」

「ほう。処女かな？」
「そうだとは思いますが……艦長ご自身でたしかめてください」
「ふむ。ところで、その青い服の娘。抵抗したのか？」
「抵抗もしましたが、この小娘は本官を、個人としても民族としても侮辱しおったのです」
　それは、わたしが言うべき言葉です。
　わたしはコレルに肩をつかまれて、強引に後ろを向かせられました。スリッパで叩かれて真っ赤に腫れたお尻が、艦長の目に晒されます。
「こいつには前部兵員室の全員を相手にさせてやります」
「いきなり三十人か。それも面白いな」
　三十人という数字。面白いという言葉。その両方に、わたしは驚愕しました。この潜水艦の中で男どもに犯されるのだとは理解していました。でも、三十人だなんて。娼婦でもないかぎり、生涯をかけてもそんなに多くの男たちと性行為を持つ女性はいないでしょう。未●年のわたしがそんな目にあわされるのを

面白いという男が世の中に存在するということも、信じられません。
　コレルに手招きされて、部屋の隅にかたまっていた水兵が、どっと押し寄せてきました。「話は聞いていたな。この小娘は、おまえたちの好きにしていいぞ。警告しておくが、とびきりのじゃじゃ馬だ」
　わたしは水兵たちに囲まれてトンネルの端へ押しやられました。
　トンネルを仕切っている壁に開いた小さな丸い穴をくぐると、そこは二メートルほどの間仕切りで区切られた小部屋が、狭い通路の両側に並んでいました。ドアもなく、ベッドを無理やりに押しこんだような小部屋です。騒ぎをよそに眠りこけている男もいました。
　ドドッドドドドド……
　大きな音が響きました。わたしは驚いて足を止めたのですが、水兵たちは平然としています。エンジンが運転を再開した音だったのです。
　お尻をパンと叩かれて、わたしはしょうことなしに歩きだしました。小部屋の列を通り過ぎて、今度は小さなドアを抜けると――そ

こは、上下二段のベッドが左右に四列ずつ並んだ空間でした。ベッドの下から木箱やバスケットがはみ出していました。呆れたことに、天井からは干し肉やパン籠が吊るされていました。

ベッドの向こうにも空間がつづいていて、そこには四本の太い円筒がこちらに向かって突き出していました。なにか作業をしていたらしい二人の男が手を止めて、わたしをじろじろ眺めています。

一番奥のベッドの上段が折りたたまれて、わたしはその横に立たされました。

奥の部屋で作業をしていた男のひとりが近寄ってきました。わたしが縛られて恥ずかしい格好にされているのに気づいて、目を丸くしています。

「おい、この娘を自由にしてやれ」

若い水兵たちと同じ灰色の作業服を着ていましたが、あきらかに三十歳を超えています。二の腕に縫いつけてある階級章も、ごちゃごちゃしています。

腕を縛っていたベルトがほどかれました。わたしは口の詰め物を取り出そうとしました

が、指先が痺れていて思うように動きません。詰め物も水兵が抜き取ってくれました。
　やっとお尻を隠せて、ほっとしました。
　わたしは痺れた腕をさすりながら、うつむいて立っていました。男どもと目を合わせる勇気はありません。それに――男の体臭と油の臭い（そして排泄物の悪臭）が入り混じった空気に吐き気がしていました。
「さて、お嬢さん」
　年長の男が猫撫で声で語りかけてきました。
「素直に服を脱いでくれるかな。こいつらに手伝わせると、破れるかもしれないよ」
（……！！）
　びくっと、わたしは目を上げてしまいました。髭面が目の前にありました。
　立っていられないほど膝が震えています。
　いずれ殺されるだろうという認識は、漠然とした不安をもたらします。相手を憎む心の余裕さえあります。でも、わたしを取り囲んでいる男どもに、今まさに犯されるのだという認識は……。
「いやあっ……許して！」
　わたしは両手で自分を抱いて、床にうずく

まりました。
「お願い！　まだ処女なんです。許してください！」
　頭の中は真っ白です。泣き叫んでも無駄だと頭ではわかっていても、そうせずにはいられません。
「心配するな。おれたちが優しく教えてやる。おまえは黙って股を開いてりゃいいんだ」
「……」
　恐怖がわたしから言葉を奪ってしまいました。男どもに背を向けてうずくまり、がたがた震えることしかできません。
「いやああーっ！　やめて！　そんなところをさわらないでえっ！」
　その悲鳴は、わたしのものではありませんでした。
「やめろ！　姉さんからはなれろ！　くそっ、こんな縄なんか……ぐえっ！」
　呻き声に、鈍い打撃の音が二発、三発と重なりました。
「やめてっ！　ハンスを殴らないで……いうことをききます。だから……」
　声が途絶えて。あとにはエンジンの運転音

だけが残りました。
　誰かがわたしの襟首に手をかけました。
「いやあああっ……！」
　乱暴に引っ張られてワンピースのホックがちぎれました。背中のジッパーが一気に引きおろされます。
　どっと男どもが押し寄せてきました。ジッパーの端からスカートの裾までが引きちぎられました。
「やめて！　許して！　いやようっ！」
　悲鳴に耳を貸してくれる男なんかいません。あっというまに、ワンピースは青いボロ布にされてしまいました。シュミーズもブラジャーも同じ運命をたどりました。
　二の腕を両側からつかまれて、身体を起こされました。ベッドにあお向けにされて、両手を頭上で押さえこまれました。何本もの手が、腿と膝と足首を引っ張ります。絶対に隠しておかなければならないところを割り開かれてしまいました。
「きゃあああーっ！　やめて！　やめて……うぐう」
　ごつい掌がわたしの口を押さえつけます。

分別臭くわたしに脱衣をうながした男が、わたしにのしかかってきました。腰から下が裸です。赤黒い棒が股間に聳え立っています。それが成人男性の勃起した性器だと気づくと、わたしは生々しい恐慌にかられました。あんな太くて長い物が、華奢な女の子の股間におさまるはずがありません。

「うううー、うぐう！」

狭いベッドの上にわたしを押さえつけているのは、通路側からだけです。男がのしかかってきたので、壁側の右足が自由になりました。思いっきり膝で蹴り上げてやりました。

「おっと……」

男は身体をひねって、わたしの渾身の反撃をかわしました。蹴り上げたわたしの膝をつかんで、肩にかつぎました。ますます恥ずかしいポーズにされてしまいました。

男はわたしの股間に腰を割り入れようと、あれこれ身体の位置を変えるのですが、内側に湾曲した壁にわたしの足がつかえて、うまくいきません。

わたしは腰をよじったり、男の肩にかみついたり、必死の抵抗をつづけました。いつま

でも抵抗をつづけられるとは、わたしも思っていません。でも、抵抗を放棄するつもりなんて、これっぽっちもありませんでした。
「掌水雷長、いっそのこと整備台に縛りつけちまいましょう」
　そんなことを言い出したのはテオでした。縛りつけるという言葉に、わたしは怯えました。コレルに心酔している男ですから、残酷な思いつきに決まっています。
「あそこには整備中の魚雷が……いや、むしろ好都合かもしらんな」
　わたしはベッドから引きずり出されて、四本の円筒が宙に浮いている区画へつれていかれました。そこは床がいちだんと低くなっています。円筒のあいだの床には背の低い台が設けられていて、そこに太いパイプのような物体が乗せられていました。人間の胴体よりも太く、長さは背丈の何倍もありました。端が細くすぼまっていて、小さなフィンとスクリューが付いていました。
　そのパイプの上へ、あお向けに押さえつけられました。手足を下へ引っ張られて、パイプを背負ってブリッジをしているような姿勢

をとらされました。
　手首はひと括りに、足首は左右別々に縛られて、両方のロープがぐっと引き絞られました。
「痛い……」
　冷たい金属が背中を圧迫します。表面に塗られた泥のような油が、ねちゃねちゃと肌に不快感を与えてきます。
　強い力で膝を左右に引っ張られました。またしても股間が、男どもの目に晒されました。しかも、腰を突き出した姿で。
「いやあ！　こんなのって……ほどいてよっ！」
「うるせえな。また口に詰め物をされたいのか」
　さっさと撃ち殺せとコレルに立ち向かった気概は、とっくに失せていました。わたしは唇を噛んで声を封じました。きつく閉じた目から、悲鳴が涙となってあふれました。
「ひっ……！」
　下腹部に刺激を感じました。つんつんと、毛を引っ張られたのです。
「ずいぶん薄いな。割れ目が丸見えだ。ガキ

を虐めてるみたいで、良心がとがめるぜ」
（言わないでえ……）
　それは、自分でも悩んでいたのです。わたしの下腹部は金色の細い毛がまばらに、それも恥骨のあたりに生えているだけだったのです。
「土手はふっくらと発育してるな」
「毛切れの心配がなくて、いいじゃないか」
「輪姦におあつらえ向きの道具ってことだ」
　あまりに勝手で露骨な男どもの言いぐさに、顔が熱くなりました。
「ああっ……！」
　ぐりっと股間をえぐられました。引き攣るような鋭い痛みを感じました。ついに犯されたのだと思いました。
　ぐりぐりぐりと、乱暴に股間を穿たれました。そのたびに痛みが股間を突き抜けます。こりっこりっと、敏感な突起に刺激が走りました。くすぐったさと苦痛が混じりあったような不思議な感覚です。これは……指で嬲られているのでしょうか。指で穿たれてこの痛さなら、あの太くおぞましい男性器に貫かれるときは――怖くて、それ以上は考えたくあ

りません。
　ぴちゃっと冷たい感触がありました。それが股間に塗りこめられていきます。わたしに見えるのは、上下が逆転した男どもの足ばかり。自分がなにをされているのかも見えません。
「これくらい濡らしておけば、じゅうぶんかな」
　なにがじゅうぶんなのかは、わたしにも理解できました。
　股間に熱くて硬い物が押し当てられました。
（く……）
　苦痛の予感に歯を食いしばりました。
　ずんっ……と押し入ってくる、それ。ぴちっとなにかが弾けました。
「痛あああーっ！　痛い、痛い！　やめてえっ……！」
　まるで灼熱した鉄杭を叩きこまれているような激痛でした。わたしは顔を左右にうち振って哀願の悲鳴をまき散らして。それでも容赦なく奥深くへ侵入してくる鉄杭。
　それが、すっと引かれました。
　最初の陵辱が終わったのだと思って、すこ

しだけほっとしました。でもすぐに、前よりも勢いをつけて鉄杭が打ちこまれました。途中まで抜いては、また奥深くまで打ちこんできます。それが急速に幾度となく繰り返されます。

ぱん、ぱん、ぱん、ぱん。

腰と腰がぶつかって、そのたびに激痛が脳天まで突き抜けます。

そして、ひときわ深くまで貫きとおされたとき。わたしの腰に密着していた男の身体が、ぶるぶるっと震えました。

直後に、鉄杭が抜去されました。こうして、わたしは純潔を奪われたのです。まだつづく疼痛の中にぽっかりと開いた空虚の感覚。でもわたしには、犯された悔しさを嘆く時間すら与えられていませんでした。すぐにつぎの熱い鉄杭が股間に叩きこまれました。

「うう……痛い……痛いよう……」

もう、叫ぶ気力もありませんでした。目は開けているのですが、なにも見えていません。涙さえ出尽くしてしまいました。うわごとのように苦痛を訴えつづけるだけです。

「なあに、だんだん気持ちよくなるって。そ

れまでの我慢だ」
　この声はテオです。鉄杭の動きとリズムが合っています。
「ひぐっ……？」
　ぼやけた視界の中に、男の腰が現われました。赤黒い男性器が聳え立っていました。男の意図がわからず、わたしは戸惑っていました。
　男性器が目の前に迫り、顔をそむけようとしたときには、半開きの口へ押しこまれていました。アンモニア臭と腐ったチーズの臭いが目と鼻を刺激しました。
　シーツを丸めた詰め物とは違う、みっちりと硬くてぷりぷりした弾力のある、それ。喉まで突っこまれて、嘔吐しそうになりました。男性器を口に咥えさせられるなんて、想像すらしたことがありませんでした。
「歯を立てるんじゃないぞ」
　言われた瞬間、そんな反撃の手段があったことに気づきました。苦し紛れではなく、はっきりと意志を持って、顎の筋肉に力をいれました。硬いステーキに噛みついたような感触でした。

「ぐわあっ……！」
　男性器が歯のあいだからすり抜けようとしました。わたしは、ますます顎に力をこめました。
「どうした、ザール？」
「うわっ！　こいつ……」
「口を開けろ。殺すぞ！」
　男たちの怒号が飛び交っています。男性器に引っ張られてのけぞった喉を、誰かがつかみました。その手が、ぐいぐい締めつけてきます。息ができません。目の前が赤くなって、頭ががんがん痛みます。それでも、わたしは口を開けませんでした。
　もしも歯ぎしりのように顎を動かしていたら、男性器を食いちぎっていたかもしれません。でも、とっさにそこまでは思いつきませんでした。
　ドン！
　お腹に強い衝撃を受けて、反射的に口を開けてしまいました。
「う、げええ……！」
　苦悶するわたしをうっちゃって、男たちはザールを取り囲んでいました。救急箱をひっ

くり返して、応急の治療を始めています。
（いい気味。噛み切ってやれなかったのが残念だけど）
　ささやかな報復を果たして、わたしは高揚していました。手足を縛っていたロープがほどかれました。わたしの反撃に恐れをなして、男たちは暴行をあきらめたのだと思いました。
　ところが。天井から鎖が引き下ろされて、それで手首を縛られました。鎖の先についている小さなフックが鎖に掛けられました。
「え……？　なに？　どうするつもりなの？」
　勝利の気分は消し飛んでいました。声が震えていました。
　U字形に垂れている細い鎖が手繰られると、わたしの手首を縛っている鎖が巻き上げられていきました。
「わたしを、どうするつもりなの？　いやだ……やめてよ！」
　わたしは、それまで縛りつけられていた太いパイプを膝のあいだに挟むような姿で吊るされました。足はつま先が床に届いていますが、体重のほとんどは腕にかかっていました。

「畜生、このガキめ……」
　股間を包帯でぐるぐる巻きにされた男が、わたしの前に立ちはだかりました。引きつった唇のすきまから黄色い歯を剥き出しにしています。
「おまえも同じ目にあわせてやる」
　男の手が、わたしの股間に伸びました。
　突起の根元をつままれて、きゅんっと絞り出されました。
「きゃうっ……ひゃああ！」
　不覚にも漏らしてしまった鼻声は、すぐに驚愕の悲鳴に変わりました。男がそこへ歯を剥き出しにした顔を近づけてきたからです。
「おい、ザール」
「止めるな。こいつに思い知らせてやるんだ」
「止めはしないさ。だけど、こいつの薄汚い血で口が汚れてもいいのか？」
「なんだと……？」
「これを使えよ」
　その男がザールに差し出したこれとは、ペンチでした。
「なるほど」
　ザールはペンチを受け取ると、それをわた

しの股間に近づけてきます。金属の凶暴なくちばしが、わたしのいちばん敏感な突起を狙って。
「や、やめて……そんなこと、しないで。お願い。もう二度と噛みついたりしません。なんでもいうことをききます。だから……ぎゃあああああっ！！」
　これまでに経験したどんな苦痛よりも激しく鋭い痛みが、股間の一点で爆発して全身を貫きました。
「あがあああああ、ああああああ……」
　ペンチの歯の部分ではなく、先端の平たい部分で突起全体を押しつぶされているようです。ぎりっと、さらに圧力が加えられました。
「うあああああっ……あああ……あああああーっ！！！」
　ぐりっぐりっと左右に捻られて、暗闇に包まれた視界の中を白い閃光が走りました。
「どうだい、お嬢ちゃん。すこしは反省したかな？」
　耳元で囁かれて、わたしはがくがくと頭を縦に振りました。
「反省してます。なんでもいうことをききま

す。絶対に反抗しません。だから……赦してください……うううう」
　最後はすすり泣きになってしまいました。この苦痛から解放されるなら、口に男性器を突っこまれようと、四つん這いになって男の靴を舐めさせられようと、なんでもしていたでしょう。そんなに簡単に自尊心を投げ捨ててしまう自分が、たまらなく厭でした。
「お嬢ちゃんも、ああ言ってる。それくらいで許してやれよ」
「しかし……こっちは、危うく男でなくなるところだったんだぞ。すくなくとも何日かは、こいつを抱けなくなっちまった」
　それが、この男が怒り狂っているほんとうの理由でしょう。
「クリトリスを去勢しちまったら、おれたちの愉しみも半減するぜ」
　テオが、またしゃしゃり出てきました。下っ端のくせに、わたしを取り扱う権限をコレルから与えられたと勘違いしているのでしょう。そういえば、掌水雷長のつぎにわたしを犯したのは、この男でした。
「副長は、こいつの無礼きわまりない侮辱を、

たった十発のケツ叩きで許してやったんだぜ。おまえも副長の寛大さを見習えよ」
「おまえも、こいつを許してやれというのか」
　ザールは憤懣やるかたないといった顔でテオをにらんでいます。
　テオは純情な人なのかもしれないと思いました。わたしの剥き出しのお尻を見ただけで男性器を暴発させそうになったのですから。
「反省してると言ったな？」
　テオに優しく訊ねられて、わたしはすがりつくように答えました。
「……はい」
「なんでもいうことをきくと、そう言ったな？」
　ぎくっとしましたが、まだテオに頼る気持ちが残っていました。
「……はい」
「これだけのことをしでかしたんだ。あと十発のケツ叩きでは罰が軽いと、自分でもそう思うだろ？」
　テオへの信頼が大きくぐらつきました。
「もう……叩かないでください。真心をこめて皆様に奉仕しますから」

憎たらしいコレルの言葉を真似するほど、わたしは卑屈になっていました。
「あっ……」
いきなり両方の乳房をわしづかみにされて、悲鳴をあげそうになりました。でも、テオにおもねる気持ちがあったので、こらえました。
「おっぱいを握りつぶせという副長の命令を、おれはまだ実行していなかったっけ」
男の掌にすっぽり包まれた乳房の根元に、ぎりぎりと指が食いこんできました。
「いやあ！　痛い！」
わたしは悲鳴をあげましたが、ペンチで責められていたときに比べれば、女の子らしいかわいい悲鳴でした。
乳房に食いこむ指の力が、ますます強くなります。そればかりでなく、ぐりぐりと乳房をねじられました。
「くうう……ううう……」
全身に脂汗がにじんできます。ふっと視線を落とすと、乳房全体が紫色になっていました。ほんとうに握りつぶされてしまうかもしれません。
「あと五十発の鞭打ちが自分にふさわしい罰

だと思っているよな？」
　テオが優しい声で、恐ろしいことを囁きました。
「ひどい……そんなに叩かれたら……死んでしまいます、あ、ひいいっ……！」
「それじゃ、ペンチのほうがいいのか？　ペンチはひとつだけじゃないぞ。クリトリスと一緒に乳首もちょん切ってやろうか？」
　わたしは心の底から震えあがりました。
「……ペンチは赦してください。五十発の鞭打ちをわたしに与えてください」
　残酷な罰をみずから願うわたしの声は震えていました。
　テオがベッドの列へ引き返して、わたしを縛っていたベルトを持ってきました。
「これで叩いてやれ。この娘の叔父の遺品だ。叔父さんにお仕置されていると思えば、そうそう文句も言わないんじゃないかな」
「ひどい……」
　小さくつぶやいただけで、抗議はしませんでした。男どもの残忍さは、じゅうぶんに学びました。ベルトを拒否したら、もっとひどい目にあわされます。たとえば……壁に掛け

てある太いロープの束で打たれるとか。悪くすると、その隣にある赤く塗られた大きな斧の峰で殴られるかもしれません。
　ベルトを手にしたザールが、目をぎらつかせながら、わたしの正面に立ちました。
「え……？」
　バシッ！
　いきなり乳房を打たれました。
「きゃああっ……！」
　お尻を叩かれると思っていました。まったくの不意打ちです。それに……同じ脂肪の塊でもお尻と乳房では痛さがまったく違います。
　バシッ！　バシッ！
　まるで往復ビンタです。
「あうっ……ひいっ……」
　二発目からは、なんとか悲鳴をこらえました。これまでさんざん屈服させられて卑屈な服従を強いられています。せめて鞭打ちくらいには毅然と耐えてみせる覚悟でした。それでも、苦悶の呻きが漏れてしまいます。
　五、六発も打たれたときでしょうか。ザールの手がだらんと垂れました。泣き叫ばない犠牲者に興味をうしなったのか、疲れただけ

なのか。ともかく、つかの間でも痛みから逃れられたと思って、わたしはほっと息を吐きました。
　その瞬間、男の手が跳ね上がりました！
「ぎゃああああっ……！！」
　すさまじい衝撃が、股間で爆発しました。わたしは獣のように吠えていました。
　激痛で背筋が反りかえって、下腹部を突き出す姿勢になりました。そこへベルトが上からたたきつけられます。
「ひぎゃあっ……！！」
「ザール、それはやめろ」
　掌水雷長とかいう年長の男が、強い口調で止めてくれました。
「魚雷を叩くな。調整が狂っちまう」
　見物の男どもから、どっと笑い声があがりました。
　この連中にとって、わたしの価値は鉄パイプ以下なのです。侮辱された悔しさに、大粒の涙がこぼれます。
　でも、その悔しさがわたしを支えてくれました。それからは、たとえ股間を打たれても歯を食いしばって悲鳴をこらえました。

誰も回数を数えていないので、ほんとうのところは何発だったかわかりません。乳房と股間だけではなく、お尻はもちろん下腹部も太腿も背中も腋の下まで滅多打ちにされましたが、気もうしなわずに最後まで耐えてみせました。肩で息をしながら股間を押さえて蹌踉とベッドルームへ引き上げるザールの後ろ姿を見送って、自分が勝ったようにさえ感じました。

もちろん、それは勝利などではありません。三十人のうち、わたしを犯したのはまだ二人にすぎません。能力を一時的にうしなったザールを除いても、あと二十七人から陵辱を受けなければならないのです。

わたしは整備台ではなく元のベッドへ戻されました。

柔らかいベッドに横たわる心地よさ。三人目の男がのしかかってきても、いっさいさからわず、好き勝手に身体を弄ばさせておきました。彼の男性器は、お腹にくっついていました。それを押し下げてわたしの股間にあてがおうとするのですが、うまくいかないようでした。やっと入口に届いたら、そこで白濁

した液を大量に噴出させてしまいました。これが、テオの言っていた暴発というものでしょう。
「このできそこないめ」
　わたしに落ち度があるのだと言わんばかりに、ぴしゃりと股間を平手打ちされました。その瞬間だけはぴくっと身体が震えましたが、どうということはありません。ベルトを叩きこまれる激痛に比べれば、平手打ちなど悪戯ともいえません。
　つぎの男は、女体の扱いに慣れているみたいでした。わたしのお尻を片手で浮かせておいて、片手で男性器をわたしの中心に持っていきました。ずぶりと鉄杭を打ちこんで、激しく抽挿を始めました。
「あ……痛い……うう、う……」
　鞭打ちの痛みは一瞬です。激痛と激痛の合間には、打たれたところの疼きに苦しめられながらも、一瞬の休みがあります。でも鉄杭の痛みは、持続する拷問でした。
　わたしは隔壁の上に掛っている時計の針を見つめて、拷問が終わる時を待ちました。男の腰が痙攣して拷問の終了を告げたのは一時

間五分後でした。たぶん、わたしの錯覚でしょう。ほんとうの持続時間は五分だったのだと思います。

五人目の男は、わたしを四つん這いにさせました。

頭を垂れると、鮮血が太腿を伝い落ちているのが見えました。そんなことには頓着せず、男は背後からわたしを貫きました。幼い頃に目撃した犬の交尾を思い出して、顔が熱くなりました。

その顔へまたしても、勃起した男性器が突きつけられました。わたしは目をつぶって口を開けました。

硬くて弾力あるそれが口を割って、喉のあたりまで押し入ってきました。そして、前後に動き始めます。ただ動くのではなく、男はわたしの頭をつかんで逆方向に揺すります。

わたしはずっと息を止めていたのですが、我慢できなくなって鼻から息を吸いこみました。とたんに、アンモニア臭と腐ったチーズの臭いと腋臭までが鼻腔を襲いました。

「うええ……」

にが酸っぱい胃液が口にあふれました。そ

れでも陵辱はつづいています。男が前後に動くたびに、唇の端から胃液がこぼれました。
　それが何十回と繰り返されて。口の中の物がぐっと膨らむと同時に脈動しました。おびただしい量の熱い液体が、喉の奥へ浴びせかけられました。
　もう耐えられません。肘から力が抜けて、ベッドに突っ伏してしまいました。
「うげえええ……」
　嘔吐に苦しんでいるわたしをいたわってくれる男など、ひとりもいません。それどころか怒声を浴びせられました。
「なんてことをしやがる。つぎにそこで寝るのはおれなんだぞ」
「そう怒るなって。若い娘の香りに包まれて眠るなんて、最高の贅沢じゃないか」
　ほかの男たちが笑い転げました。
「小便臭い小娘のゲロと、おまえたちのザーメンにまみれてか。それくらいなら、魚雷発射管の中で寝たほうがましだ！」
「おーい、ディート。おまえのせいなんだから、ベッドを譲ってやれ。順番にハンモックを使えば公平だろ」

仲裁の声がかかって、それで悶着はおさまりました。一匹の獲物を分け合う狼の行儀よさといったところでしょうか。

そうしてつぎの二匹が、前後からわたしに襲いかかってきました。

輪姦の嵐が過ぎ去ったとき、わたしは床に転がされて半ば失神していました。

鉄張りの床の冷たさが、しだいに身体の芯までしみとおってきます。時計を見上げると、二時過ぎでした。壁に明り取りの窓がないので断言できませんが、午前二時ということはないでしょう。

こんな時間だというのに、ほとんどのベッドが埋まっていました。陵辱の舞台に使われたベッドでも、最初にわたしの口へ射精した男が眠りこけていました。シーツも毛布もないところだけが、他のベッドと異なっていました。

それにしても。女性を拉致して強姦したり昼間から眠りこけていたりして、よく戦争ができるものだと呆れてしまいました。わたしは軍艦が――とくに潜水艦が二十四時間体制

で運用されているのだとは、まだ知らなかったのです。

何日も囚われているうちにわかってきたのですが、潜水艦の勤務は原則として三直、一部の部署と士官は（六時間ずつ二回の）二直勤務になっています。狭い潜水艦内に乗組員の数だけベッドを置く余裕はありません。前部兵員室では十六台のベッドと二張りのハンモックを、三十人が交代で使っていました。

そうしてわたしも――ベッドと同じように扱われる運命だったのです。これも後で知ったのですが、この時点では、わたしを犯した男どもの数は十八人でした。もちろん、それだけでも（というには、あまりに多すぎる人数ですが）、数時間前までは処女だったわたしにとっては筆舌に尽くしがたい残酷で恐怖に満ちた体験でした。それなのに、戦列から脱落したザールを除いてもまだ十一匹の狼が、わたしを狙っていたのです。

そして、もうひとつ。ひと晩眠ると、男どもはまた性欲をたぎらせるのだという恐ろしい事実も、わたしは知りませんでした。

――魚雷整備台の隅で三人の男たちがトラ

ンプをしていました。それをぼんやりと眺めているわたしに気づいたのでしょう。三人はうなづき合って立ち上がり、こちらへやって来ました。
「きたねえな」
　お尻を蹴られました。わたしは身体を起こして、そいつをにらみつけました。短い休息でも幾分は回復した体力が、気力を支えてくれました。
　怒りがこみあげてきました。汚いという男の言葉が、事実だったからです。全身に刻まれた鞭打ちの痕。乳房に残された指の刻印。内腿は破瓜の血と男どもの白い汁でまだらに染まったままです。唇がひきつれた感触は、半乾きの精液がこびりついているせいです。
「あなたたちじゃないの、わたしを滅茶苦茶にしたのは」
　三人が顔を見合わせました。
「おっかねえな、このお嬢ちゃん」
「だけど、お嬢ちゃんの言うとおりだ。責任ってやつをとらなけりゃな」
　そう言ったのは、わたしのお尻を蹴ったやつです。

「はあ？　おまえ、この劣等民族の淫売と結婚でもするつもりか？」
「まさか。おれは、お嬢ちゃんをきれいに洗ってやろうと言っただけだ」
「洗うって……ここは潜水艦の中だぞ。どこに風呂がある？」
「そうさ。潜水艦の中だ。大西洋のど真ん中でもある。まあ、ついて来いよ」
　わたしは腕をつかんで立たされました。いやな予感はありましたが、身体を洗ってもらえるなら、すこしくらいの辱めや暴力は我慢しようと思いました。それほど、わたしの身体は惨めに汚れていたのです。
　わたしは腕を引かれるままに、両側から張り出したベッドのすきまを縫って、小部屋に区切られた区画へ足を踏み入れました。
「きゃっ……！」
　小部屋の床に、ジーナとハンスの姉弟がひと括りにされて投げ出されていました。裸身の上下を逆にして向き合う形で。ハンスの顔はジーナの股間に、そしてジーナの顔はハンスの股間に押しつけられていました。ジーナの口の中に弟の男性器が挿入されているのは

明白でした。
「みないれ……！　そんなつもりらないのに……ろめんなさい、ねえさん……」
少年が、姉の股間にふさがれた口で必死に訴えました。
口が女性器の代わりになるという破廉恥きわまる事実は、わたしが身をもって体験させられていました。それを姉と弟とに強制するとは……わたしは、フランツ・コレルという名のサディストの童顔を思い浮かべて、憎悪の念をたぎらせました。誰が手をくだしたにせよ、あの男が考えついたに決まっていると、わたしは確信しています。
でも実際のところ、わたしは他人の心配をしている場合ではなかったのです。
わたしは甲板に引き出されました。潜水艦は大きな水圧に耐えられるよう、円筒にちかい形状をしています。円筒の側面を削ぎ落とした部分が甲板です。広いところでも幅は三メートルほどでした。
甲板から海面まで一メートルちょっとでしょうか。艦首の切り裂く波が、甲板より高くうねっていました。

九月上旬だというのに、風は肌寒いくらいです。臭気にばかり気をとられていましたが、潜水艦の中はずいぶん暑かったのでした。
わたしは手首を重ねて前で縛られました。
「やだ……もう縛らないで」
「命綱だよ。溺れ死ぬのはいやだろ？」
「死なれちゃ困る。まだ愉しませてもらってないしな」
わたしは艦尾へ追い立てられました。甲板はますます狭くなってきて、二メートルもありません。このあたりには手すりも付いていませんでした。もし足を滑らせたら、確実に転落するでしょう。
「よし、たっぷりと洗ってやるぞ」
言葉と同時に、海へ突き落とされました。
「きゃああっ！」
叫んだ口に、どっと海水が流れこみました。
「うぶぶ……ぶはあっ……」
海水は吐き出しましたが、息ができません。艦尾がまき起こす波に引きずりこまれて、身体が独楽のようにまわっています。手首に縄が食いこみ、肩に激痛が走ります。
息を止めて、引き上げてくれるまで耐える

しかありません。

必ず引き上げてくれるはずだと、わたしは確信していました。死なれちゃ困る。まだ愉しませてもらっていない。それは陵辱の予告ですが、生命の保証にもなっていました。

がんがん頭が痛くなって気をうしないかけたとき、自分が海面に浮かびあがっていることに気づきました。わたしは顔を上げて空気をむさぼりました。釣でも楽しんでいるかのように、笑いながらロープを手繰り寄せている男の顔が見えました。

甲板に引き上げられてしばらくのあいだ、わたしはあお向けになって荒い呼吸を繰り返していました。海へ転げ落ちるのが怖くて、両脚を踏ん張るように開いていました。羞恥心なんか消し飛んでいました。

気持ちが落ち着いてくると、ペンチや鞭で付けられた傷に海水がしみる鋭い痛みに苦しめられました。体表の汚れだけはきれいに洗い流されていましたが、それは三人の男たちの獣欲を刺激する結果になりました。海水を滴らせている髪もそのままに、わたしは艦内へつれ戻されました。

そうして、陵辱劇の第二幕が上がったのでした。

眠るための寝床をあてがわれたのは、つかの間の休息と果てしない強姦が一昼夜にわたって繰り返された後のことでした。それもベッドではなく、天井から吊るされたハンモックでした。

狭い艦内は、ただでさえ空間が不足しています。ベッドの下には野菜や果物の木箱が詰めこまれ、ただ一か所のトイレにさえ缶詰が山積みされています。天井も例外ではなく、干し肉やパンが吊るされています。それを勝手に食べないようにと――わたしはハンモックの上からぐるぐる巻きにされて、整備台の上にあったのと同じ太いパイプの横に吊るされました。

窮屈で屈辱的な寝床でしたが、すくなくとも男どもに犯されない安息がありました。目の前に若い女の裸身がぶらさがっているのですから、悪戯をしかけてくる男は何人もいました。けれどわたしは、胸やお尻をさわられても悲鳴をあげないくらいには図太くなって

いました。お尻のあいだに指を差しこまれたときは、悔しさに肩が震えましたけれど。

――食事の匂いを嗅ぎつけて、わたしは目を覚ましました。男の体臭や油と排気ガスの臭いが混じりあって、ゴミ溜めに首をつっこんでいるような気分になりましたが、それでもお腹がぐうぐう鳴りました。一昨日の夜から、なにも食べていなかったのです。

潜水艦には食堂なんかありません。ベッドの下から小さなテーブルが引き出されて、そこに食事が並べられます。

わたしもハンモックから解放されて、食べ物を与えられました。黒く焦げたトースト、黄身が流れてしまったベーコンエッグ、腐りかけのレモン。それらが、雑然とボウルに投げこまれました。食事、食べ物――いいえ、餌です。

小さなテーブルには男たちがひしめき合って、わたしの席などありません。床の隅にうずくまってボウルを抱えこんで。惨めな気持ちでフォークを使っていましたが、食べれば食べるほど空腹感がつのってきます。分量だけは男たちと同じくらいにあった残飯を、わ

たしはあっという間にたいらげてしまいました。

男たちの食事が終わる頃合を見計らって、レイチェルがつれてこられました。ピンクのスーツは油にまみれていましたが、破られてはいませんでした。男たちの人数に驚いたようでしたが、ふうと溜息をついただけで、さっさと自分からベッドに腰掛けました。品定めでもするみたいに、男たちの顔をひとりずつ眺めています。わたしも最初のうちは髭もじゃの外見にだまされていたのですが、水兵の多くは二十三歳のレイチェルよりも年下なのです。

わたしはレイチェルと入れ替わるように、前部兵員室からつれ出されました。隔壁を出たすぐが小部屋の並ぶ区画ですが、いちばん手前の小部屋にだけドアがありました。そこはトイレでした。

わたしはトイレの使用を許可されました。というよりは、排泄を強要されました。艦内にトイレはひとつしかありません。捕虜の使用は一日に二回、五分ずつに制限すると申し渡されました。

トイレのドアを閉めることは許されませんでした。
「ひとりにして自殺されても困るからな」
トイレットペーパーと山積みの缶詰しかない空間で、素裸の娘がどうやって自殺するというのでしょう。男たちの目的は、わたしを辱めること――ではなく、自分たちが眺めて楽しむためなのは明らかでした。たちまちのうちに、トイレの前の狭い空間は男たちで埋まりました。
わたしは、それほど生理的欲求が差し迫ってはいませんでした。海に突き落とされたときか、それとも（恥ずかしいことですが）輪姦のさ中にでも失禁していたのかもしれません。けれど、あと十二時間も我慢できる自信はありませんでした。
わたしは目を閉じて、男たちを視界から締め出しました。排泄に意識を集中させようとしました。でも、羞恥心が頑として立ちはだかっています。出口まで小水が押し寄せている感覚さえあるというのに、一滴も出ません。
わたしはあきらめて、ふうっと息を吐きました。それを待っていたかのように、見物人

の誰かに下腹部を強く圧迫されました。
「ひゃんっ……」
　悲鳴といっしょに、勢いよく小水がほとばしり出ました。
「いやあ……」
　わたしは両手で顔をおおいました。こんな状況でも、排泄には快感がともなっていました。そのことが、恥ずかしさを倍化させました。
　トイレから出たわたしは、士官たちに引き渡されました。小部屋に仕切られた区画は彼ら士官と一部の上級下士官に割り当てられた個室だったのです。
　ハンスが、さっきまでのわたしと同じように、ハンモックで簀巻にされて天井から吊るされていました。ジーナの姿は見えません。
　わたしを受け取った四人の中に、コレルの姿がありました。
「あなたに犯されるくらいなら、死んだほうがましだわ――フランツ・コレル」
　手ひどい報復を受けるかもしれなくても、言わずにはいられませんでした。
　男は鼻で嗤っただけでした。

「本官も、おまえのようなじゃじゃ馬は願い下げだ。そばかす娘を分かち合ったから、予言は成就したわけだしな」
　意味不明の言葉でしたが、最悪の運命はまぬかれた。そう思って、ほっとしました。でも、現実には――そのときのわたしには想像もつかなかった最悪以下の運命が待ちかまえていたのです。
「とはいえ……そばかす娘に比べると、少年のように見えるな。おお、そうだ……」
　コレルはベッドの脇にある小さなデスクから鋏を取り出しました。
「男の子のようにしてやろう」
「いやっ……！」
　コレルの意図を察して、わたしは身を翻しました。でも、そこには別の士官がたちはだかっていました。
「きゃああっ……！」
　後ろから髪をつかまれて。
　ザクッ……！
　一瞬の出来事でした。十三歳のときから鋏をいれずに丹精してきたお気に入りの髪が、自分の胸も腰もお尻も嫌いですけど、これだ

けは自慢できた金色のロングヘアーが、ばっさりと裁ち切られたのです。
「なんてことをするの！　叔父を殺して、みんなを殺して、船を沈めて、わたしの純潔まで奪って……それでも、まだ足りないっていうの！？」
　半泣きで抗議するわたしを真正面から見おろしていた男が、ぽつりとつぶやきました。
「うむ……まだ物足りないな」
　そして、前部兵員室に向かって呼ばわりました。
「おおい、アルベルト。鉄アレイを持っていたな。いちばん小さなやつを貸してくれ」
　鼻の下だけを剃っている水兵が、いわれた品を持ってきました。それをコレルに渡して引き返そうとしましたが、呼び止められて新しい命令を実行しました。それは、わたしを羽交い絞めにすることでした。
　あろうことか、コレルは鉄アレイをわたしの股間にあてがいました。
「いやあっ！　そんなの無理！　裂けちゃうっ！」
　いちばん小さいという鉄アレイですが、握

りこぶしくらいの大きさはありました。
　それが、ぐいっと股間を押し上げました。
「いやあああっ……痛い！　痛い！！」
　腰を振ってのがれようとしたのですが、わたしを羽交い絞めにしている水兵の後ろから別の腕が伸びてきて、腰をつかんで動きを封じました。
「ほんとうに無理なんです。お願いですから……やめてください」
　涙が止まりません。激痛であふれる涙と、世界でいちばん憎んでいる男に哀願する悔し涙とが。
　コレルが、ついと身を引きました。
　わたしは、彼のすることをじっと見つめていました。これまでに幾度も、安心したりなにかを期待するたびに、手ひどく裏切られてきました。この残忍な男が、あっさりと目論見を放棄するはずがありません。
　コレルはベッドの下から缶詰の空き缶を取り出しました。その中に指を入れて、どろっとした茶褐色の泥のようなものを掬い取りました。わたしが縛りつけられた鉄パイプに塗られていた油でしょう。それを鉄アレイに塗

りつけています。
「まさか、濡れる穴にまで使うことになるとはな」
　また意味不明の言葉をつぶやきながら、股間に鉄アレイを押しつけてきました。
「ぎゃあああっ！」
　股間に穿たれた穴を極限まで押し広がられるのがわかりました。処女膜を破られたときと同じか、それ以上の痛さでした。
　がぼふっ……
　体感を文字にすれば、そうなります。頭部をいったん咥えこんでしまうと、入口を貫通しているのは細いグリップの部分です。男性器よりも細いそれは、今のわたしにはほとんど苦痛を与えませんでした。でも、入口から奥は……ものすごい圧迫感です。
　コレルが鉄アレイから手をはなしました。奥から入口にかけて、圧迫感が下がってきます。でも入口にはばまれて、鉄アレイは股間にぶらさがったままでした。
「ふむ。これで少年ぽくなったかな」
「巨根ですねえ」
　鉄アレイを男性器に見立てて、男どもが囃

したてます。わたしは憎悪も屈辱も忘れて、ただ恥ずかしさだけで頭がいっぱいになりました。

コレルが、わたしに四つん這いになるよう言いました。あらがう気力は残っていません。股間におさまった鉄アレイが入口をこじ上げて、そこが引き攣れる感覚がいっそうわたしを辱めます。

命じられた姿勢をとりながら、私は当惑していました。陵辱されるはずの部分は、すでにふさがれています。このサディストは、なにをするつもりなのでしょう。

答えは、すぐに与えられました。排泄器官を指でなぞられたのです。ねちゃっとした感触は、鉄アレイに塗られた粘っこい泥でしょう。

「まさか……そんなことって……？」

排泄器官に男性器を挿入するなんて、神の摂理に反した行為です。でも、不道徳な人たちのあいだでは行なわれているのでしょう。わたしは一瞬のうちに、さまざまなことを理解していました。神に滅ぼされた街の名を口にするとき、おとなたちが声をひそめる理由。

濡れる穴と濡れない穴。そして――女性器を持たないハンスが選ばれた理由。
「そんなこと、とは……」
　わたしのつぶやきを聞きとがめたコレルが、排泄器官を指で揉みほぐしながら言いました。
「こんなことかな？」
　ずぶっと指を突き立てられました。
「あひゃあっ……！」
　わたしは甲高い悲鳴をあげました。痛みもありましたが、それ以上に驚きの叫びでした。
「いやあ……やめてください」
　ささやき声になっていました。今にも神の雷に撃ち殺されるのではないかと、半分は本気で怯えていました。そしてそれ以上に――便意を刺激されて恥ずかしかったのです。
「まだまだ、これからが本番だぞ」
　がしっと腰をつかまれました。もう覚えこまされてしまった硬くて熱い感触が、排泄器官に押し当てられました。
「いやあ……こんなのって……いけません。許されざる行為です……」
　わたしは肛門をきゅっと閉じて、男の侵入を防ごうとしました。そこを無理やりにこじ

開けられる、引き攣れるような灼熱感。
「大きく口を開けて、息を吐き出せ」
　わたしは頭を激しく振って命令を拒絶しました。
　すると、鉄アレイがゆっくりと引き抜かれていきます。入口が極限まで拡張されていく激痛。お尻に感じたのと同じような痛みです。
「つうう……いやあああっ！」
　痛みを少しでもやわらげようとして、下半身から力を抜きました。とたんに、めりめりと肛門を引き裂かれました。
「あああああ……」
　悲鳴が嘆きに変わりました。神の摂理に反する行為を受け入れてしまったのです。
　鉄アレイとは違って太さの変わらない物体を挿入されたそこは、いつまでも灼熱感がつづいています。息を吐き出すときだけは、わずかに痛みが薄らぎます。けれど息を吸おうとしてお腹に力を入れると、やけつくような痛みが襲ってきます。
　悶え苦しんでいるわたしを無視して――いいえ、この男のことです。わたしをさらに苦しめようとして、排泄器官を貫いている物体

を前後に動かしはじめました。
「はあ、はあ、はあ、ひいいっ……はあ、はあ、はあ、ひいいっ……」
　くやしいけれど、わたしの身体はこの男に支配されているも同然でした。
「こうしながら、こうしてやると……」
　鉄アレイが、ぐりっとこじられました。男の腰の動きに合わせて、鉄アレイまで前後に動きはじめました。奥深くまで押し入れられて頭部が女性器の奥に突き当たり、途中まで引き抜かれて頭部が入口を引き裂きます。
「あの小僧は、泣きながらびんびんにおっ勃てていたぞ」
　男の言葉は理解不能でした。わたしはただ――前も後ろも激痛に苛まれて。男が一秒でも早く欲望を吐き出してくれることだけを願っていました。
　それなのにコレルはときどき腰の動きを止めて、獣欲を制御しているようでした。できるだけ長くわたしを苦しめるつもりなのでしょう。
「はあ、はあ、は……ぎゃあっ！」
　不意に鉄アレイが完全に引き抜かれ、また

すばやく押しこまれました。
「ううう、痛い……もう許して……ひっ！」
　とうとうわたしは、卑劣な仇敵に赦しを乞ってしまいました。
　それなのに、この男は、ますます激しくわたしを責めたてます。
　見える範囲に時計はありませんでした。時間経過がわかれば。まだ五分だから、あと同じ時間だけは耐えてみせると、自分を励ますこともできたかもしれません。でも、止まった時間の中で果てしなくつづく激痛は、わたしの気力を急速に奪っていきました。
「痛い……もう、いやあ。お願い……赦してください。もう……射精してください！」
　半狂乱で哀願していました。正気では、とても口にできない言葉でした。
　それでも。
「神に呪われた劣等民族のケツマ●コを高貴なチ●ポ汁で清めてください。言ってみろ」
　そこまで自分を――いえ、アイデンティティーの中核を貶めることはできません。
「あなたたちこそ、神に呪われて……ぎゃあああっ！」

鉄アレイが反対側の頭部で入口を引き裂くほど深くえぐりこまれました。一瞬、身体が宙に浮いて――意識がなくなりました。
失神からさめたとき、ほかの男にごくふつうの形で犯されているとわかって、わたしは安堵しました。悲しい安堵でした。

士官たちの慰み物にされた翌日には、潜水艦の後部にある機関室へまわされました。わたしはそこで、まだ見知らぬ十人の相手をさせられたのです。
ここの男どもは最初にレイチェル、つぎはジーナに獣欲を吐き出していましたから、貪欲に何回もわたしをむさぼるようなことはありませんでした。三日間で二十回あまりの陵辱を加えられただけでした。
彼らはわたしを人間――とまではいいませんが、性処理の道具としてではなく、奴隷くらいには扱ってくれました。わざと出来損ないばかりを寄せ集めた食事ではなく、きちんとお皿に盛りつけてくれました。コロッケは、ちゃんとコロッケの味がしました。コーヒーには砂糖も入れてくれました。

衣服も与えてくれました。彼らが着ているのと同じ作業服です。といっても、袖が両方ともちぎれていて、あちこちが破れていました。上衣だけで、ズボンはもらえませんでした。それでも、素裸で放り出されているよりは、はるかにましでした。上衣はだぶだぶで、丈が太腿の三分の一くらいまであったので、肝心の部分は隠せました。

奇妙な話ですが、わたしはこの場所で初めてキスをされました。それまでは口に男性器官を突っこまれることはあっても、キスをされたことはなかったのです。キスまで初体験だったわけではありません。でも、唇を重ねるだけでなく、舌を絡めたり歯の裏側を舐めたりするキスは知りませんでした。

機関室の隅にある仮眠ベッドのひとつが、わたし専用にあてがわれました。交替でベッドを使わなければならない水兵に比べて破格の待遇です。もっとも、片足を短いロープでベッドの脚につながれていたので、行動の自由はありませんでした。

それが潜水艦とわたし、双方の安全を配慮した処置であったことが、だんだんわかって

きました。人間の背丈ほどもあるディーゼル機関が剥き出しで作動しているのです。さわれば火傷をしたり腕を巻きこまれる危険な箇所が、あちこちにあります。逆に、さわってはいけない弁やハンドルもおざなりなカバーがあるだけで、剥き出しも同然です。

とうぜんですが、ほかのどの場所よりもエンジンの音がうるさいのが機関室です。騒音ではなく轟音でした。水兵たちの会話は怒鳴りあいでした。

最初は頭痛に見舞われましたが、半日もすると慣れてしまいました。消耗していたせいもあるのでしょうが、エンジンの轟音を子守唄がわりに熟睡できるまでになりました。

二日目の昼前だったでしょうか。すっかり環境の一部になっていた轟音が、ぴたりと止まりました。と同時に、ぐぐーっとベッドが傾きました。

「え……？」

あたりを見回すと、持ち場についている水兵たちの表情が緊張していました。なにかトラブルが起きたのかもしれません。

わたしにとっては、どうでもいいことです。

すこしくらい人間めいた扱いをされたところで、わたしの運命は変わりません。おおぜいの男たちに犯されつづけて――飽きられたら処分されるでしょう。港へ帰りついたとしても、収容所へ入れられるだけです。わたしの人生は年単位ではなく、せいぜい週単位で刻まれているのです。

「深度二十メートル」

　そんな声が聞こえてきました。では、この船はエンジンが止まって沈んでいるのです。このままエンジンがなおらずに沈没してしまえば、いっそせいせいします。

　このときわたしは、この船が潜水艦であることを忘れていました。大量の空気を消費するディーゼル機関を使えないので、潜行中は電気モーターで推進するなんて知識もありませんでした。

　ベッドの傾きが戻ってしばらくすると、隣の厨房からジャガイモを茹でる匂いが漂ってきました。わたしもこの頃には、なにも異常事態は起きていないのだと悟っていました。昼食がちかいせいか、水兵たちの表情もなごんでいます。

ひとりの水兵が壁際へ寄って、そこに固定されているバケツの蓋を開けました。そして放尿を始めたではありませんか。
「きゃ……」
男性器を見せられて驚くわたしではなくなっています。けれど、職場で堂々と立小便をする男がいようとは思ってもいませんでした。
水兵がわたしを振り向いて、にやりと笑いました。
「潜航中はトイレが使えないからな。お嬢ちゃんも、ここでするんだぜ」
男どもに見物されながらの排泄は、無理強いの刺激がなくても、なんとか自分の意思でできるようになっていました。でも、バケツとなると話は別です。そこに溜まっている小水が跳ね散りそうで、考えただけで鳥肌が立ちます。
浮上後はトイレに行列ができると、その水兵が言いました。
結局わたしは昼食後にトイレを使えず、深夜に割り当てられている順番がくるまで、脂汗を流しながら尿意をこらえる羽目になったのでした。

３．絶頂

十人しかいない区画に三日間も留め置いたのは、わたしを回復させる目的があったようです。人道的配慮なんかじゃありません。玩具を長持ちさせたいからに決まっています。

四日目。囚われた日から数えれば七日目に、前部兵員室へ戻されました。まっさきにわたしを犯したのは、わたしが男性器を噛み切りそこねたザールでした。犯したというよりは、男性器で女性器を拷問したというほうが適切でしょう。おざなりの前戯どころか唾で濡らすこともせず、乾ききった私の股間に鉄杭を打ちこんだのです。

わたしは歯を食いしばって拷問に耐えました。涙は見せませんでしたが、ひさしぶりの鮮血が内腿を汚しました。

ほかの男どもは、それほど乱暴ではありませんでした。偽りの優しさにあふれていました。

傷つきやすい果実を扱うように乳房を揉み、蝶が蜜を吸うように乳首を舐め、羽毛で撫で

るように女性器の縁をなぞり、溶けかけたチョコレートボンボンをつまむようにそっと突起を転がします。そうしながら、わたしの反応をうかがうのでした。

執拗に性器を刺激されれば、おぞましさしか感じていなくても、肉体はわたしの意思を裏切って、男を受け容れる準備をととのえてしまいます。

「濡れてきたな。気持ちいいんだろう？　甘い声で泣けよ」

男どもは、ますますわたしの身体を弄びます。

四十八人の男どもに繰り返し抱かれてきた身体です。がさつな愛撫にもすこしずつ肌を馴らされてしまいまいた。いじくられているうちに、乳首がじんじんしてきます。突起を刺激されると、そこから鋭いさざ波が腰に広がっていきます。でもそれは、わたしにとっては形を変えた苦痛にしかすぎません。叔父を射殺したコレル、同朋を皆殺しにしたフォイト、わたしの処女を奪った掌水雷長、わたしを残虐に扱ったテオ、ザール。彼らの顔をひとりずつ思う浮かべながら、わたしは苦痛

に耐えたのです。

根負けするのは、きまって男のほうでした。男どもの八割は、十八歳から二十五歳までの性欲旺盛な（そして女性経験に乏しい）若者です。いつまでも女体で遊んでいては、それこそ暴発させてしまいかねません。順番待ちの連中からもせかされます。

わたしは甘やかでおぞましい拷問から解放されて、獣に戻った男の猛々しい蹂躙にさらされるのでした。

欲望を放出した獣が獲物からはなれると、すぐにつぎの男がベッドに腰掛けます。三十センチメートルの（と、コレルが制限した）トイレットペーパーでわたしの股間を拭うと、壊れた楽器からメロディを引き出そうとする演奏家のように神妙な面持ちで、わたしの全身に指を這わせます。演奏家が肉食獣に変身するのに、さほどの時間はかかりません。

兵員室へ戻された翌日には、もう男どもは私をもてあましていました。わたしに比べれば、ほかの二人の女性は男どもにとって扱いやすかったかもしれません。

レイチェルやジーナが男に弄ばれている場

面に遭遇することも、幾たびかありました。そのときの印象を率直に述べてみようと思います。彼女たちを貶めるつもりなど、ありません。ただただ、彼女たちの適応力に感心するばかりでした。

二十三歳のレイチェルは、最初から抵抗を放棄していました。どうせ犯されるのだからと、あきらめている面はあったのでしょうけれど、彼女はより積極的にふるまっていました。男に合わせて腰を動かし、女性の突起を男の下腹部に擦りつけ、男の手をみずからの乳房へ導くことさえありました。男の行為に耐えるというよりは、そこから苦痛ではなく快楽を引き出そうと努力していました。彼女は、与えられた運命を巧みに泳ぎきろうとしていたのでしょう。

●五歳のジーナは、レイチェルのように割り切ることなどできません。暴力に怯えて脚を開き、泣きながら犯されていました。でも、わたしのように強情ではありませんでした。

「痛い、やめて！」とは言いません。

「痛い、優しくしてください」と、甘えるように訴えました。

「そこはいやあっ！」でも、わたしのように全面的な拒絶ではなかったのです。
「おっぱいなら……もっと乱暴にしてくれてもいいです」
　狼といえども憐憫の情はあるのでしょう。彼女が受容できる程度に力を加減します。腰の動きも穏やかになります。
　男どもの愛撫には、わたしと同じようにおぞましさが先に立っているようでした。それでも――わたしにとっては形を変えた苦痛でしかない感覚を、彼女は切ない喘ぎで表出していました。コレルのような根っからのサディストはともかく、たいていの男たちは、その幼い喘ぎ声をもういちど少女から絞り出そうとして、いっそう優しく彼女を扱います。
　彼女は運命に流される木片でした。奔流に揉みくちゃにされながらも、沈むことなく漂っていました。
　運命にまっこうから逆らっていたのは、わたしだけでした。流れをせき止めれば、水かさはますます高くなっていきます。いずれ堤防は決壊して、わたしを呑みこんでしまうでしょう。それは、自覚していました。

こうした視点に立てば、男どもがわたしを性的に感じさせようとしている状況は、けっして不都合ではないはずでした。男どもが殺人者であり、わたしたちを人間と思っていない強姦魔であることを、わたしが許容できるとすれば――です。

「くそったれ！」

ヴィレム・フォイトはベッドに腰掛けて、後ろ向きにまたがっているわたしを突き上げるように揺すりながら、乳房と股間の突起を同時に弄んでいました。わたしがまったく反応しないので、腹を立てたのでしょう。

不意に突起をきつくつねられました。

「くっ……」

呻き声までは殺せませんでしたが、わたしは悲鳴をこらえて男の腰にまたがったままでいました。これくらい、へっちゃらです。

「娼婦だけじゃないぞ。花屋のヒルダも看護婦のヴィッキーも、これでメロメロにしてやったんだ。おまえは不感症だ。そうでなけりゃ、発育が遅れてるんだ。このガキマ●コが、その証拠だ」

まばらな恥毛が、何本もまとめて引っこ抜

かれました。わたしは女性器を貫かれたまま、男の腰の上で黙っていました。
　脚を開けと言われれば開きます。またがって腰を上下に動かせと言われれば、そのとおりにします。でも、どんなにつらくても赦しなんか乞いません。悲鳴なんか、絶対にあげてやりません。
「おい、なんとかいったらどうだ」
　シーツも毛布もないベッドの上に投げ出されました。わたしはヴィレムの顔を見上げました。にらんではいません。憎しみをぶつける価値さえ、この男たちにはないのです。
「てめえ……！」
　ヴィレムが手を振り上げました。わたしは相手をじっとみつめたまま、打擲にそなえて歯を食いしばりました。
「叩いても逆効果だと思うけどな」
　アルベルトが、のんびりと声をかけてきます。この男の鉄アレイで、わたしは初めての異物挿入を体験させられたのでした。
「この子は、しょっぱなから縛られたり叩かれたり、ここではさんざんな目にあってるんだ。感じろというのが無理なんじゃないかな」

「そんなことはない。ヒルダなんか、五分とかからず……」
「あんたの腰を抜かしたんだろ？」
「きさま。一等兵の分際で伍長に喧嘩を売るつもりか？」
「やめろや。５０１はゲマインシャフトだって言ったのは、誰だっけな」
　ごくありふれた喧嘩をおざなりに仲裁する別の声。前線勤務の潜水艦内で女性を輪姦するという異常な行為が、この連中にとってはすでに日常と化しているのです。
「まあ、待てよ」
「なにか考えがあるんだろ、アルベルト？　さっさと言っちまえ」
「まあな。この子にとっちゃ、ここは嫌な思い出しかない場所だ。しかも臭いし、狭い。もっと広くて清潔なところでかわいがってやればいいんじゃないかと思っただけさ」
「このゴミ溜めのどこに、そんな場所が……あったな」
「だろ？　それに、邪魔な壁もない。前後左右から、右のおっぱいも左のおっぱいも、マ●コもケツも、両舷勤務の総員配置ってやつ

だ」
　さすがに不安になって、わたしは目を泳がせました。一週間も聞いていれば、海軍の用語もすこしは理解できるようになります。通常の交替勤務ではなく、非番の者まで動員されるのが両舷勤務。総員配置は、文字どおりです。
「よし、作戦開始。総員掛かれ――だな」
　腕を引っ張られて、わたしはしぶしぶ立ち上がりました。なにをされるか、およその見当はつきます。けれど、さからえば一週間前と同じ目にあわされるかもしれません。
「服を着るあいだだけ待ってください」
　わたしは、ヴィレムに脱がされた作業服の上衣を頭からかぶりました。どうせすぐ脱がされるとわかっていても、裸で引き回されるなんて我慢できません。
　予想していたとおり、甲板でした。司令塔の真後ろで、この艦としてはいちばん広い場所です。といっても、手すりから手すりまでの幅は三メートルほどですが。
　外の世界は、目がくらみそうになるほど明るく輝いていました。剥き出しの手足に吹き

つける風は寒くても、潜水艦の中の蒸れるような空気よりは、ずっと爽快でした。
（空気って、こんなにおいしかったんだ）
　わたしは何度も深呼吸をしました。ひと呼吸ごとに穢されつくした身体が清められていく思いでした。
　青い空に夏のような入道雲はなく、細い雲が流れていました。海も黒味がかっていて、灰色の潜水艦のひく航跡がどこまでも白く伸びています。荒涼たる眺めでしたが、それはそれで、今の自分に似つかわしく感じられました。
「おい、そこの連中。なにをしてるんだ？」
　いきなり声が降ってきました。五メートルほどの高さの司令塔から、士官が見おろしていました。砲術長のシュミット中尉です。
「へへ……お嬢ちゃんがご機嫌斜めなんで、気分転換をさせてやってるんで」
　シュミット中尉の直属の部下にあたる掌水雷長（彼のほうが年上です）が、にやにやしながら答えました。
「どうせ、それだけじゃすむまい。これでも敷いておけ」

シュミットが毛布を投げてよこしました。水を吸って重くなっているのでしょう。毛布は風にあおられることもなく、わたしがまだ名前を知らない水兵が下で受け取りました。
「さて、続きを――と、言いたいところだが。見世物にはなりたくねえな」
ヴィレムが尻込みするのも無理はありません。狭い甲板には、十人ほどの男たちが上がっていました。司令塔からも見おろしています。ベッドの片側からだけ見物されるのとは大違いです。わたしだって絶対に厭ですが、わたしの意見は誰もきいてくれません。
「お手並み拝見といこうじゃないか。アルベルト……ん？　やつ、どこへ逃げた？」
そのアルベルトが、バケツを持ってハッチから姿を現わしました。コップを取り出して、そこに怪しげな小瓶の中身をちょっとだけ注ぎました。それをオレンジジュースで割って、わたしに突き出しました。
「飲めよ」
小瓶の中身がなになのか、見当はつきました。だから、手を伸ばすのをためらいました。
「毒じゃない。ほら……」

アルベルトがひとくち飲んでみせます。男たちがうらやましそうにざわめきました。

しかたがありません。わたしはコップを受け取って、おずおずと口へ持っていきました。思っていたとおり、アルコールの臭いが鼻をつきました。

お酒を飲んだことはありませんが、酔っ払えばどうなるかは知っています。でも、お酒で気分が良くなるのと、性行為で気持ちが良くなるのとは、別の問題ではないでしょうか。わたしには男の考えていることがわかるようで、わかりませんでした。

けれど、わたしに選択の自由はありません。覚悟を決めて、コップの中身を口に流しこみました。臭いをのぞけばオレンジジュースそのもので、するっと喉をとおりました。ジュースとちがって、喉がかあっと熱くなります。そして、お腹の中が燃えるようです。

「さて……と。野暮な物は脱いじまえよ」

裸になったわたしの腰に、ロープが巻かれました。海へ突き落とされた恐怖が甦りました。それでも、背中を押されるとさからわずに艦尾へ行きました。

わたしは甲板にあお向けに寝かされました。ボロ布を手にした男たちが取り囲み、バケツに海水を汲んでわたしの身体を洗い始めました。

海水は身を切るような冷たさでした。潮風も、濡れた身体から体温を奪っていきます。けれど、そんなに寒くはありませんでした。いくら体温を奪われても、身体の芯からどんどん熱が湧いてくるみたいでした。

わたしは首をかしげて、ボロ布でこすられている腕を眺めました。垢が黒い塊になって、ぽろぽろと剥げ落ちています。一週間ものあいだお風呂どころか、ろくに身体も拭けなかったのだから当然ですが、わたしは自己嫌悪におちいりました。

男たちに（媚びてお願いするのではなく）要求すれば、海水をひたしたボロ布くらいは差し入れてもらえたでしょう。そうしなかったのは――身体の清潔にすら関心をうしなっていたからです。女性として恥ずかしい思いでした。身体を綺麗にすれば、かえって強姦魔どもを喜ばせる結果になったかもしれませんが、それは別の問題です。

「ひゃあ……！」
　何日かぶりに、わたしは素直な悲鳴をあげてしまいました。ボロ布が股間をえぐったのです。正確を期するなら――股間に秘められた襞の裏側をこすられました。
「こりゃ、すげえ。見ろよ、お嬢ちゃん」
　錠剤のような白い塊が鼻先に突きつけられました。甘酸っぱい臭いでした。腕からこそげ落ちる垢どころではありません。男と結合している部分を露骨に覗きこまれても平気になってしまったわたしでも、顔が赤くなりました。
「これだけ分厚くこびりついてたら、そりゃ感度も落ちるわな」
「こっちはどうだ？」
　くりっと、鋭敏な突起を剥かれる感覚。
「いやあ……」
　腰をよじって手からのがれようとしましたが、左右から押さえこまれてしまいます。
「いやだあ……そんなところ、こすらないでよう」
　恥ずかしさをごまかそうとして、舌ったらずな言葉づかいになってしまいました。

腕をこすっていたボロ布が、胸とお腹に移ってきました。乳房が根元から先端にむかって、ぐにっぐにっとこすり上げられています。
「くう……いやあ……」
苦痛は、ほとんどありませんでした。ほてった身体に冷水が心地よくさえ感じられました。ただ、どうしようもなく恥ずかしくて、わたしの身体を弄んでいる男どもへの憎悪が萎えていきます。
首からつま先まで垢をそぎ落とされると、身体を裏返しにされました。恥ずかしい部位が男どもの目から隠されて、すこしだけほっとしました。背中をこすられるたびに、冷たい鉄の甲板で押しつぶされた乳房が滑り止めの凹凸に食いこんで、自分で自分を虐めているみたいでした。
最後は座らされて、顔を拭かれました。口を開けさせられて、歯の裏側まで指でこすられました。
「ひょう……女っぷりが上がったぜえ」
「新品同様ってとこだな」
からかいの声の中に本心の賞賛が混じっています。わたしだって女の子ですから、悪い

気はしません。けれど。
（こんなに汚れたのは、あなたたちのせいなんだから！）
　ひび割れに憎悪のセメントを流しこんで、わたしは心の壁を補強しました。
　司令塔の後ろにある広い甲板へつれ戻されました。湿った毛布が敷かれています。そこが、わたしを『両舷勤務の総員配置でかわいがる』見世物の舞台でした。
　わたしの作業服がきちんとたたまれて、毛布の端にちょこんと置かれていました。ただそれだけのことなのに、なぜかうれしくなってしまいました。アルコールの影響かもしれません。
　毛布の上にあお向けになったわたしを取り囲んで、男どもが座りました。
　わたしは、両舷配置の意味を理解しました。ベッドの上でなら、壁際へ逃げることもできます。強引に引き戻されるまでの数秒間だけでも、男の手からのがれていられました。でも今は――どちらへ逃げても、そこに男の手が待ちかまえているのです。
（好きなだけ嬲りなさいよ）

湿った毛布の気持ち悪さを背中に感じながら、わたしは空を見上げていました。細い雲がゆっくりと流れています。わたしは、あと何回くらい空を見ることができるのでしょうか。男どもの話を聞いていると、あと一か月は港へ戻らないようです。これから一か月も地獄の日々が続くのです。たった一か月でわたしの人生は終わるのです。

視界の端で手が動きました。

（始まる……）

わたしは意識して全身の力を抜きました。緊張していると、刺激に敏感になってしまいます。自我も感覚もない、性欲処理人形になろうとつとめました。

（え……？）

予想を裏切って、右腋に手を差し入れられました。手がゆっくりと上下左右に動きます。わたしをくすぐっているのです。親指が乳首をさわりました。つまむとか転がすのではなく、ごく軽く、ほんとうに先っぽだけをくすぐっています。

「く、ふ……」

声が出てしまいます。

左の腋も、別の男が同じようにくすぐりはじめました。
脇腹もくすぐったくなってきました。指を立てて、こちょこちょ動かしている感じです。
脚にも何本かの手がとりつきました。膝の裏をくすぐられ、太腿を撫でられています。鼠蹊部まで指が這ってきて、今度こそと覚悟すると、そこでついと逃げていきました。
「く、くすぐったい……やだ……もうやめて……く……んんん……」
ひっきりなしに声が漏れてしまいます。甘えているような響きになってしまいます。くすぐっている相手を憎むのは、とても難しいことです。
性的な興奮なんか、まったく感じていません。けれど、くすぐったさにアルコールの影響が重なって、心のまわりに築き上げていた憎悪の壁は崩壊寸前でした。
内腿を這い寄ってきた指が、今度は逃げずに内側へ侵入しました。なにも考えず感じないようにしようとしていても、どうしてもそこを意識してしまいます。指は……襞を包んでいる花弁の輪郭をなぞっただけで、すっと

離れていきました。
（お願いだから……）
　そこから先は恥ずかしくて、頭の中だけでも言葉にできません。お願いだから、もうじらすのはやめて。さっさと犯して。そんなこと、わたしは思ってなんかいません！
　上半身をまさぐっていた手が乳房を包みました。じわーっと上下から圧迫してきて、不意に手がはなれます。手は乳房からお腹まで指で歩いて、へそのまわりをくすぐり始めました。別の手が乳房を左右からリズミカルに揉んで、またすっと逃げていきます。
　だんだんと、もどかしさがつのってきました。考えないようにしている言葉が、喉元までこみ上げています。
　まったくの不意打ちで――突起を包んでいる皮が、すうっと撫でられました。
「ひゃんっ……！」
　叫んでしまってから、わたしは悔しくて泣きそうになりました。はっきりと嬌声だったからです。
　不本意な嬌声にこたえるように、くりっくりっと皮がつままれました。乳首までが、指

のあいだに挟まれて転がされました。
「ひゃああ……いやあ」
　乳首が硬くしこり、突起がじんじんと痺れます。腰の奥から熱いしたたりが、じわーっとにじみ出てきます。
　突起からびりびりと電気が走り、それが腰に広がっていきます。
　それは――これまでに体験したことのない感覚でした。そこをさわられたとき、さざ波のような感覚が生まれることはありました。けれど。それが背骨をさかのぼって、乳首から放射される電流と絡みあい、全身が電気の塊になっていくような不思議な感覚は――未知のものでした。
「あ、あああ……ああん」
　高まっていく感覚が声になってしまいます。
　わたしがちょっとでもそんな声を出してしまうと囃したてる男たちが、今日はなにも言いません。ひと言も口をきかず、それでいて何本もの手がひとつの意志で操られているかのように、わたしの身体じゅうを刺激しています。
「なんなの、これ？　怖い……もう、やめ

て！」

未知の領域へ押しやられることへの恐怖。いえ、漠然とした知識はあります。来る、飛ぶ、落ちる、死ぬ。そういった言葉で表現される頂点が、この先にあるのだと――その予感に怯えました。

わたしは全身でもがいて、男たちの手からのがれようとしました。が、肩と腰を押さえつけられて、身動きできなくされてしまいました。

左右の乳房にひとりずつが取りついて揉んでいます。双つの乳房に加わる、リズムも強弱も異なる刺激。それが、わたしを惑乱させます。

内側の襞がくつろげられて――すでに熱いしたたりのあふれている場所に、ぬぷっと指が侵入しました。

苦痛はありません。そこからも、新しい感覚が生まれました。一点からの放射ではなく、下腹部全体を圧迫するような、小さいけれど重量感のある波。

くるっと包皮が剥かれました。もっとも鋭敏な粘膜が冷たい外気に曝される――心地よ

さ。そこへ、熱い息が吹きかけられました。強烈な電撃が背骨を駆け上がります。
「いやあああああっ……！」
　それは悲鳴でした。なのに……悲鳴は尾を引いて、吐息へと変わってしまいます。
「ああああ……ああああんん……」
　がぜん、男たちの手の動きが速くなりました。とともに、いつもの荒々しさに戻っていきます。それなのに。
「やめて……そんな……胸をつかまないで。おかしく……なっちゃう」
　いったん点じられた官能の炎は、強い風に煽られてますます燃えあがっていきます。
「中で指を……指を動かさないでえっ！　ひゃんっ！　やめて……」
　自分がなにを言ったのか、よく覚えていません。
「もっと強く……女の子の突起を、もっと強く……こすってよう！」
　禁断の言葉も口走っていたと思います。
　剥き出しの突起が、たぶん爪でしょう、きゅっとしごかれました。脳天まで突き抜ける衝撃に、背中が反りかえりました。

「うあああああああっ……あああああーっ！」
　生まれて初めて経験する絶頂でした。
　浮かした腰の下に、クッションみたいな物をあてがわれました。
　ずぶっと、一気に挿入されました。
「はあああああ……」
　全身を焼き尽くす炎の中にぽっかりとあいていた空虚。そこがようやく満たされた充足感がありました。
　ふっと気がつくと、ヴィレムの顔が間近にありました。
　ヴィレムが激しく突いてきます。絶頂のあとの緩やかな下り坂にさしかかっていたわたしは、ふたたび官能の頂点へ追い上げられていきます。乳房が揉みしだかれ、乳首をつままれて転がされています。結合部に誰かの手が潜りこんできて……突起を刺激し始めました。指の動きとヴィレムの腰の動きが重なって、すさまじい快感が弾けました！
「いやあああああっ……怖いっ……怖いよ！助けて……助けてえ！」
　わたしは本気で助けを求めていました。快感の嵐に憎悪の壁はとっくに吹き飛ばされ、

いまは自我さえも崩壊しようとしています。
「いやだ……やめて……やめてえっ！」
　拒否の言葉を叫びながら、わたしはヴィレムに合わせて腰を上下に振っていました。わたしの肉体は自我の束縛から解き放たれて、本能に支配されています。
　ヴィレムがぶるっと震えて――わたしから身をはなしました。
「いやだ……やめないで……もっと滅茶苦茶にしてえ！」
　つぎの男（誰だったか、もう思い出せません）がのしかかってきて、わたしの切ない願いはあっさりとかなえられました。
　男がつぎつぎに入れ替わり、そのたびにわたしは頂点からさらに高く追い上げられていきました。
「あああああぁっ……なに、これ？　わたし……どうなるの？　いやああ……もう……すごく……いいいいいっっ！！」
　そう叫んだのは覚えています。
　あとで男たちから教えられたのですが、わたしは全身を痙攣させて、そのまま意識をうしなったのだそうです。

　でも不思議なことに、そのあとで男たちが交わした会話を記憶しています。
「ふう……」
　マッチを擦る音がしました。
「驚いたな。ここまで乱れるとは思っていなかった」
「ああ……」
　高温多湿だから、どんな銘柄でも最悪の味に変質する――これは、煙草のことでしょう。
　しかし、この一服だけは途轍もなくうまい――わたしを絶頂に追い上げたことが嬉しくてたまらないようです。
「レイチェルはよく啼くが、ここまで悶えたことはないな」
「ジーナも、こんなふうに啼かせてみたいな」
「二人とも、ここへつれてこないか？　三人並べて啼き声コンテストなんて、面白いぞ」
　これがテオの声だったことだけは確信があります。それとも、断片的な記憶と男たちからあとで聞いた話をつなぎ合わせた、わたしの空想でしょうか。
「それもいいな。けど、今日はそんな気分じゃねえ。そこまで派手にやらかすには、艦長

の了解ももらっといたほうが、よさそうだしな」
「早いとこ、すましちまおう。風が冷たくなってきた」
　海水にひたしたボロ布で、男たちがわたしの股間をぬぐい始めました。その冷たさを、わたしは払いのけようとして手を動かしました。
「お目覚めのようだぜ」
　わたしは身体を起こしたのですが、潜水艦が勝手に傾いて、また倒れてしまいました。
　わたしは抱え起こされました。口元にコップがあてがわれました。アルコール入りのオレンジジュースです。すごく甘くておいしくて――むさぼり飲みました。
　なぜ潜水艦が宙返りをするのでしょう。なぜわたしは天に向かって落ちていかないのでしょう。
　誰かがわたしの上に落ちてきました。感覚が麻痺した股間で、なにかがうごめいています。
「こりゃ、だめだ……丸太ん棒だ」
　そんなことを言って、空の青に溶けていき

ました。
　こんどは酔いつぶれて、わたしの意識は完全に途切れました。

　つぎに意識を取り戻したとき、わたしは困惑していました。
　自分がどうふるまったか、なにを口走ったか、そのときはほとんど覚えていませんでした。甲板での様子は、ずっとあとになってからぽつりぽつりと甦った記憶の断片を再構成したものです。
　そのときのわたしは――恐怖を感じるほどの快楽に翻弄されたことしか覚えていませんでした。そんな快楽をわたしから引き出した男たち。そんな痴態を見られてしまった男たち。つまり……わたしをほんとうの意味で女にしてしまった男たち。彼らに憎悪の念を持ちつづけるのは、むずかしいことでした。
　こんなことになってしまったのですから、彼らが強姦魔であると弾劾する資格は、もうわたしにはありません。でも――彼らが殺人者であるという事実だけは否定できません。短機関銃を撃ったのはデオですし、砲撃を指

揮したのはシュミット中尉です。大砲を操作していた三人の水兵の名前も、見当がついていました。そして、誰よりも。叔父を射殺してテオに発砲を命令したフランツ・コレル。

では、この男どもだけが憎悪の対象かというと、そうではないのです。コレルは別ですが、ほかの五人は軍人として命令に従っただけです。当直割が違っていれば、別の五人が殺人者になっていたでしょう。ですから、四十八人全員が憎悪の対象なのです。そうでなければならないのです。

それなのに、やさしい声をかけられると、はにかみながら笑みを返してしまうようになりました。

あの日、わたしは夜遅くなってから目覚めて、ひどい頭痛に苦しめられました。二日酔いでした。翌日の夕方まで、起き上がれませんでした。そのあいだ、男たちは手を出してこなかったのです。それどころか、冷たいタオルで頭を冷やしてくれたり、食事時間でもないのに熱くて苦いコーヒーを運んできてくれたりしました。

もちろん、つぎの日からは以前と同じハー

ドスケジュールが課せられたのですが……わたしもまた、人形を貫きとおすことは不可能になっていました。口に出して拒否すること自体を、わたしは自分に禁じていたのに、なし崩しになったばかりか、声に甘えるような響きさえ混じってしまいました。男の行為で過剰な苦痛を与えられないようにと、自分から迎え挿れるような動きをしてしまいました。そして……官能の声まであげてしまったのです。

そんなとき、わたしは自己嫌悪に苦しみました。つぎの男には、無反応を心がけました。そして、またしても喘ぎ声を漏らしてしまうのです。

このままでは、相容れない二つの感情に心が引き裂かれてしまうのではないか。そんな予感がありました。

男たちがどこまでわたしの葛藤に気づいていたかは、わかりません。以前と変わらず、命じられたことには素直に従っていたのですから。

以前のわたしは、男どもへの軽蔑と憎悪を隠していませんでした。でも今は、それにち

かい感情を自分に向けていました。
以前のわたしは、かすかな官能のさざ波を理性で打ち消していました。でも今は、大波となって打ち寄せる官能を感情が否定するのです。
男たちには、わたしが性感の目覚めに戸惑っているように見えたのかもしれません。そうして単純な男たちは、迷惑きわまりない結論に達したのです。
もういちど、甲板で『両舷勤務の総員配置で』かわいがってやろう。テオが提案した啼き声コンテストまで実行に移されました。
――わたしとジーナとレイチェル。そしてハンスまで甲板に上げられました。最近ではコレルのおぞましい性癖を真似る者も何人かいるようでした。
レイチェルもジーナも、わたしと同じように綻びだらけの作業服を着せられています。ハンスはわたしたちとは反対に、作業服のズボンだけを穿かされていました。
わたしたち四人は、たしか十六日ぶりの再会だったと思います。トイレへ行くときなどに、顔を合わせることはありました。犯され

ている現場も何度となく見ていました。でも、おたがいに口をきくことはありませんでした。会話を禁じられていたわけではありませんが、いったい、なにを話すのでしょう。挨拶を交わす気分ではありませんし、頑張ろうねと励ましあうのは――もっと男どもに犯されましょうと言うのと同じことです。現に今も、わたしたちは目線を合わそうともしていません。

レイチェルは、ぶんむくれています。彼女は性的陵辱を甘んじて受け容れ、経験の浅い男どもを手玉に取っている一面はありましたが、ごくノーマルな感覚の持ち主のように思えます。わざわざ開けっぴろげな甲板に引き出して、しかもほかの女たちと『啼きっぷり』を比べようなんて趣向は、不愉快きわまりないでしょう。

ジーナは、いつも以上に興奮している狼どもに囲まれて、ただただ怯えています。開発途上にある性感が、この環境で花開くことなど、絶対にないでしょう。

わたしはというと――恐怖にとらわれていました。あんなふうに乱れたのはアルコールのせいに違いありません。またアルコールを

飲まされたら、同じ結果になってもしかたありません。でも、もしも……アルコールがなくて、前と同じように乱れてしまったら。もう生きていられません。

生贄の中で唯一の男性、ハンスは――水兵の肩に支えられて立っていました。白いやせこけた頬にそばかすばかりが目立ちます。姉の騎士たらんと健気にふるまっていた少年の面影はうしなわれていました。

無理もありません。この子の姿だけは、しょっちゅう見ていたのです。士官室の天井からハンモックで簀巻にされていた姿を。わたしたちのように、ひっきりなしの性欲処理に使われていたわけではないのです。ここしばらくは、物好きな水兵がハンモックから引きずり出すこともありましたが、基本的にはコレルの専用玩具でした。

昔の海賊船なら、いえ今でも商船とか大型の軍艦なら、少年を雑用にこき使っていたかもしれません。でも潜水艦には、雑用というものがまったくないのです。高度な専門知識と熟練した技能が要求される仕事ばかりです。ハッチの閉め忘れ、深度計の読み違え、トイ

レを含むさまざまな弁の誤操作、調理用電熱器への吹きこぼしが引き起こすショート。そのすべてが全員の生死に直結しているのです。
　コレルが少年を使わないとき、つまり一日のうち二十三時間以上は、少年はずっとハンモックに吊るされていたのです。食事と排泄まで、サディストのコレルは一日一回に制限していたようです。最低の栄養状態で最悪の環境で、運動どころか手足も動かせない状態で拘束されていたのです。支えられてでも立っていられるのは、彼の生命力が強靭だった証ではないでしょうか。
「これはまた、盛大に集まったものだな」
　二十人ほども集まっている甲板に、コレルがのっそりと姿を現わしました。
　皆は略式の敬礼をしましたが、コレルは上着の裾に手を当てたまま答礼をしませんでした。
「まず、悪いニュースだ。艦長は、この催しにお冠だ。乱痴気騒ぎに貴重な消毒用アルコールを消費するなぞ、もってのほかとのお言葉だ」
　では、わたしはしらふで快感と闘わなけれ

ばならないのです。ここのところ、男どもの監視の目は緩んでいます。たとえば、アルベルトの鉄アレイを服の裾に結んで海へ飛びこめば……

「つぎは良いニュースだ。なぜか、ここにブランデーが二本もある！」

　コレルが上着の裾から手を引き抜くと、歓声と口笛の嵐が吹き荒れました。わたしたちの緊張をほぐすためだけに使う分量としては多すぎます。

　二日酔いのときに聞いた話ですが、潜水艦の中では非番のときでもお酒は厳禁なのだそうです。だから、この前アルベルトが毒見をしたとき、皆がうらやましそうな顔をしたのでした。

「ジーク、ハイル」

　お調子者が、踵を打ち合わせてナチス式の敬礼をしました。

「ただし、三時間以内に埒をあけるんだぞ。作戦命令を受電した」

　前にも増して大きな歓声が湧きました。でも、男たちの顔つきは一変していました。肉食獣の本能に目覚めたような、獰猛な面構え

です。
「本艦は一七〇〇にＵ４８４と合流予定。爾後、〇七五に転針する」
　一瞬で歓声が消えました。最初の数字は十七時という意味です。〇七五は北をゼロとして時計回りに三百六十度で表わした方位です。輸送船団は西から来るはずのなのに、この船は東へ向かうというのです。
「本艦の任務は猟犬狩りである」
　水兵たちの反応は両極端に分かれました。アルベルトとザールは、黄色い歯を剥き出しにして拳を肩の高さでぐっと握り締めました。フォイトは真っ青になってコレルを見つめています。そちらのほうが、多数意見のようです。
「心配するな。本官にはとっておきの秘策がある」
　コレルが余裕たっぷりにうなずいてみせました。
「すでに予言は成就された。頭上の脅威は取り除かれたのだ。相手が重巡だろうと戦艦だろうと、土手っ腹に魚雷をぶち込んでやる」
　神がかった言葉に眉をひそめる者もいまし

たが、おおかたの水兵は、彼の自信に満ちた態度に感化されたようでした。
　ブランデーの封が切られて、寄せ集めのコップにワンショットずつ注がれました。
　コップの底にどろりと淀んだ金色の液体を舐めてみましたが、舌が焼けつくようでした。芳香だとかまろやかな味だとか男たちが言っていますが、わたしは消毒用アルコールのオレンジジュース割りのほうが好きです。しかたがないので、息を止めて一気に飲みくだしました。
　すぐに、かあっと全身の血が沸騰し始めました。これから自分がどうなっても、それはアルコールの仕業なのです。
　――わたしたちは二メートルほどの間隔をあけて、甲板に寝かされました。司令塔のすぐ後ろがレイチェル、それからわたし、ジーナ、ハンスの順です。
　わたしはほかの三人のことも、仇敵のことも、いっさい考えないようにつとめました。なにもかも忘れて、男たちの手がわたしの身体から快楽を引き出すのにまかせました。
「ああん……おかしくなっちゃう。やだ……

そんな……やさしくしないで。もっと強く揉んで……お願い、もう挿れてよう！」

たぶんわたしは自己暗示にかかっていたのでしょう。すでに未知ではなくなっている官能の急坂をぐんぐん駆けのぼっていきました。「お願いです……休ませてください。ほんとうに気分が悪いんです。吐きそうなんです」

ジーナの訴える声が、わたしを正気に引き戻しかけました。彼女はアルコールを受け付けない体質なのかもしれません。

男たちはジーナを抱えて、前部甲板のほうへつれ去りました。甲板の幅はそちらのほうが広いのですが、まん中に大砲が居座っています。その台座に括りつけておくつもりではないでしょうか。

レイチェルはおとなですから、お酒にも親しんでいるのでしょう。聞こえてくる嬌声は、ふだん耳にしているそれと、まったく変わりません。

ハンスは姉さんと違ってアルコールに強いようでした。というのは――四つん這いの姿で後ろからカンプ中尉に排泄器官を貫かれながらコレルに口を犯されていても、嘔吐した

りせずに耐えていたからです。耐えていただけでなく、彼の男性器官は勃起していました。（あんな目にあわされても、気持ちがいいのかしら？）

それとも、ほんとうに嫌で厭でたまらなくても、そこを刺激されているうちに濡れてしまうように、彼の勃起も意に反したものなのでしょうか。

背後からおおいかぶさっているカンプ中尉が、ハンスの腰に手をまわして、勃起をしごき始めました。

それ以上見ているのはかわいそうに思えて、わたしは目をそむけました。

――狂宴が二時間もつづいた頃でしょうか。わたしは、たしか五人目か六人目か七人目の男にまたがって腰を激しく動かしながら、男の数と同じ回数の絶頂にさしかかっていました。レイチェルは口も使ってふたりずつを相手にしています。ジーナもつれ戻されて、五人がかりで幼い快楽を強制されていました。ハンスはいません。かわいそうに、またハンモックで簀巻にされているのでしょう。

「右舷二時、浮上します！」
　司令塔の上から鋭い声が飛びました。
　男たちはいっせいに立ち上がりました。ズボンを引き上げながらハッチへ飛びこむ者、前部甲板へ向かって駆け出す者。わたしも腕を引っ張られました。腰も膝もがくがくして、男につかまっていなければ立っていられません。
「そのまま！」
　コレルが一喝しました。剥き出しの下半身をレイチェルに咥えられているというのに、不思議と威厳がありました。
「あれはＵ４８４だ。邂逅予定が早まったと連絡があった」
「しかし副長……これは、ちょっとまずいんじゃ？」
　シュミットが、裸で立っているわたしを親指でさしました。
　ちょっとなんてものじゃないと思います。軍隊が女性を監禁して、しかも集団で犯すなんて、醜聞以外のなにものでもありません。
　浮上直後だというのに、向こうの甲板には水兵が鈴なりです。

「かまわん。４８４の連中にも、たっぷりと拝ませてやれ――続けろ」
　さすがに、その命令にしたがう水兵はいませんでした。男たちはきまり悪そうに持ち場へ散っていきました。
「胆の据わっとらん兵隊ばかりだな」
　わたしたちは甲板に並んで立たされました。後ろに水兵がひとりずつ立って手首をつかんでいるので、なにもかも丸見えです。三人とも、これくらいできゃあきゃあ騒いだりはしません。わたしは、ぼんやりと向こうの水兵を眺めていました。ふてくされた表情くらいはしていたかもしれません。
　手でメガホンを作って叫んでいる者もいましたが、声は聞こえません。
　そのうち、向こうの司令塔で水兵が小さな旗を振りはじめました。黄色と黒に塗り分けられた旗を両手にひとつずつ持って、上や斜めに伸ばした腕が、カチッカチッと機械仕掛けのように一瞬ずつ止まります。なにかの合図でしょう。
　三十秒ほどで旗を振り終えると、その水兵はじっとこちらを見ています。視線の先を追

ってみると、こちらの司令塔でもテオが同じ旗を振っていました。いつのまに移動したのか、横にコレルが立っています。
　テオが動きを止めると、また向こうで旗を振りはじめます。
　そんなやりとりが何度か繰り返されるうちに、潜水艦同士は十メートルほどの距離に近づいていました。向こうの潜水艦からゴムボートがおろされました。
　司令塔からコレルが下りてきました。
「レイチェル、おまえはＵ４８４へ行け」
　意味がわからず、レイチェルはぽかんとしています。それは、わたしも同じでした。水兵たちも呆気にとられたようにコレルを振り返っています。
「このボートだけがご馳走をひとり占めにしていては、士気にかかわる。おまえを４８４の連中に譲ることで話がついた」
　レイチェルの顔がこわばりました。対照的に、水兵たちはほっとした様子です。向こうの潜水艦も共犯者にしてしまえば、醜聞は隠蔽されます。
「これまでの三倍のノルマだな。淫乱なおま

えには、ありがたい話だろう？」
　さすがにレイチェルは、コレルに憎悪の眼差しを向けました。ところが、向こうの水兵がふたり甲板に上がってくると、ふいに表情を変えました。
「この人たち、臭くないわね」
　なぜか彼女は、コレルにではなくわたしとジーナに話しかけました。
「海へ出て何日も経っていないんじゃないかしら。そうなんでしょ、コレルさん」
「臭い男は嫌いだったのかな。それにしては……」
「つまり、この船が港へ戻るときになっても、あっちはまだ戻らないのね」
　レイチェルは、そこでコレルに向きなおりました。
「この子達も、港へ戻る前にほかの船に引き渡すつもりなんでしょ。コレルさん？」
　わたしは、そしておそらくジーナも、瞬時にレイチェルの言っている意味を理解しました。レイチェルの推理が当たっていれば、わたしたちは二度と陸へ戻れません。そのかわり、収容所送りはまぬがれるのです。何か月

かは、もしかすると何年も生き延びられます。そんな生に意義があるのかは疑問ですが、すくなくとも日を限られた死の恐怖からは解放されます。
「素晴らしいアイデアだな」
　コレルが唇の端をつり上げました。笑っているようには、ちっとも見えません。
「本官は、お喋り女は嫌いだ」
　ぱんっと、レイチェルの頬をはたきました。かつてわたしに見舞ったビンタに比べたら、愛撫も同然の軽い打擲でした。
「男の胸の裡を見透かす女は、もっと嫌いだ。つれていけ」
　犬を追い払うように、コレルが手を振りました。
「はいっ！　では、この捕虜はＵ４８４にて管理させていただきます」
　潜水艦乗り独特の肘をおりたたむ敬礼をして、ふたりの水兵がレイチェルの二の腕をつかみました。
「わたしの服を返していただけるかしら？」
　破れた作業服を受け取って、レイチェルはゴムボートに乗り移りました。

潜水艦の中に姿が隠れるまで、レイチェルは一度もこちらを振り返りませんでした。それが、あの人のわたしたちにあてたメッセージのように思えました。